新体制の出発に向けて

―不易と流行―

日本歌人クラブ会長　神作光一（かんさく こういち）

四九〇〇人余の会員の皆様には、ご健勝にておすごしのことと推察いたします。去る五月二十一日（土）の日本歌人クラブの定期総会の折りに、中央幹事の選挙が行われ、皆様のご支持によりお陰様で当選をすることができました。その上、当選者九名の互選という所定の手続きを経て、当日の総会に報告され、私が新会長の重責をになう運びとなりました。任期は三年間ですが、緊張感で身の引き締まる思いが一入です。

八年と七ヶ月にわたって私どもをお導きくださった藤岡武雄前会長に対し、ここで改めて心からなる感謝を申しあげたいと思います。

さて、新体制の出発に向けて、私としては「不易と流行」という理念のもと、柔軟に、誠実に努力をしたいと思っています。つまり、「不変」なるものは、しっかりと継承し、堅持し、尊重していきます。また、「変化」するものへの真摯な対応と着実な実行をも心がけて参ります。申しあげるまでもなく、日本歌人クラブは、昭和二十三年（一九四八）九月二十三日、千代田生命ビル講堂において創立総会を開催し、現在に及んでいるという輝かしい歴史を有しております。したがいまして、平成二十年（二〇〇八）には創立六十周年を迎えることになります。そのことを念頭に置きつつ、「和」の精神をベースに、バランス感覚を持って、種々の事柄に一生懸命対処してゆきたいと考えています。そして、日本歌人クラブの発展と充実に尽くしたいと決意しております。

つきましては、会員の皆様の格段のご協力と建設的なご助言とを、ここに切望しておきたいと思います。何とぞよろしくお願い申しあげます。

日本歌人クラブ会誌148号　目次

新体制の出発に向けて……神作光一（1）
定例総会報告……原田清（2）
会務報告……（3）
日本歌人クラブ中央幹事選挙結果報告……（4）
平成16年度決算報告……（5）
新会長・名誉会長のプロフィール……（8）
新名誉会員のプロフィール……（9）
第32回日本歌人クラブ賞・第11回新人賞選考経過報告……原田清・石黒陽子（10）
第3回　同評論賞経過報告……御供平佶（11）
中央幹事職務分担表……（11）
歌人クラブ賞受賞歌集紹介……原田清（12）
同受賞のことば……大下一真（13）
歌人クラブ新人賞歌集紹介……石黒陽子（14）
同受賞のことば……里見佳保（15）
歌人クラブ評論賞受賞著書紹介……御供平佶（16）
同受賞のことば……原田清（17）
歌人クラブ評論賞受賞著書紹介……御供平佶（18）
同受賞のことば……松坂弘（19）
作品五首……（23氏）……（20）
CLUB NEWS
全国役員名簿……（24）
大会予告・報告……（26）
タンカジャーナル……塩野崎宏・椎木英輔（27）
新入会員紹介……（28）
総会出席者名簿……（32）
故人哀悼　工藤幸一氏を悼む―佐久間晨／大井恵夫氏を悼む―高橋誠一……（34）
長澤美津氏を悼む―清部千鶴子……（35）
日本歌人クラブ叢書参加募集広告……（35）
幹事会メモ・事務所日録……（36）
タンカジャーナル研究会お知らせ・編集後記……（表3）
全日本短歌大会お知らせ……（表4）

平成十七年度
定期総会報告

会場　東医健保会館大ホール
日時　平成17年5月21日（土）正午開会

五月二十一日（土曜）正午から東医健保会館に於て、平成十七年度日本歌人クラブ総会が行なわれた。司会、御供平佶。議長大塚善子。まず藤岡武雄会長の挨拶。総会に先だち今年は中央幹事改選の年に当たり、午前十時より午後一時の間、選挙を実施。結果は別項通り、選挙管理委員長名で報告書が提出されている。

議事。①会務報告、書面にて省略。②新会員紹介、名簿の配布、七三〇名の多数ゆえ。会場に出席の新会員の起立、全出席会員の拍手をもって終わる。市原志郎担当。

③議案、第一号議案、平成十六年度決算報告、原田清、同監査報告、椎名恒治。第二号議案、平成十七年度予算案、原田清。

以上各案に対し、質疑の結果、出席全会員の承認を得て、平穏のうちに終了。

名誉会長・名誉会員推戴

一、名誉会長　藤岡武雄。

平成八年日本歌人クラブ会長に就任して、三期八年にわたり、まさに東奔西走、歌人クラブの発展と向上につくされたことは全歌壇の認めるところであり、その功績は歴代会長のうちでも類を見ないものです。このたび定年勇退をむかえるにあたり、その功績を称え、日本歌人クラブ全会員名により、名誉会長に推戴することに決定しました。新会長神作光一と共に、なお会の発展のためにお尽し下さることを願う。

一、名誉会員、浅田雅一、大越一男、豊田清史の各氏。各氏は長年にわたり、中央幹事、参与、また、会計監査、あるいは地方ブロック代表幹事等を歴任され、会の発展向上のために尽くされました。その功にむくい、称えるために、名誉会員に推戴する。大越一男氏、謝辞。

日本歌人クラブ各賞贈呈式。

・第32回日本歌人クラブ賞　大下一真歌集『足下』選考経過報告及び紹介・原田清

定例総会会場風景

・第11回日本歌人クラブ賞新人賞　里見佳保歌集『リカ先生の夏』選考経過報告及び紹介、石黒陽子

・第3回日本歌人クラブ評論賞・原田清『會津八一　人生と芸術』、松坂弘『定型の力と日本語表現』の選考経過報告及び紹介・御供平佶・花束贈呈。

・受賞者挨拶。大下一真、里見佳保、原田清、松坂弘

・来賓挨拶、岩田正、来嶋靖生

・小憩の後、講演会

講師・能村研三先生。講師紹介・神作光一

演題「俳句における社会性―俳句は機会詩となりうるか」

・謝辞　藤岡武雄

この間、別室に於て中央幹事選挙の開票が行なわれ、その結果が発表された。選挙管理委員長、原田清。選挙及び総会を通じ、取沙汰されていた混乱もなく平穏のうちに全てが終了。懇親会に移る。司会、林田恒浩、市原志郎。出席者多数の辞を得た。（原田清）

総務担当報告

・平成16年度定期総会を同年5月22日に東医健保会館で開催

・平成16年6月19日に第10回全国幹事会を東京グリーンホテル水道橋にて開催

・月例の中央幹事会を8月を除く毎月開催

平成16年4月1日～平成17年3月31日迄の新入会員は583名、退会および死亡者は394名

（原田清）

渉外担当報告

第19回ふくおか2004平成16年11月13日久留米市石橋文化センターで開催

第20回ふくい2005平成17年10月29日美浜町総合体育館で開催予定

第21回山口

第22回徳島　（御供平佶）

事業担当報告

平成16年7月24日第25回全日本短歌大会を東医健保会館にて開催。そのほか、他委員会と協調して活動した。日本歌人クラブ叢書の刊行は本年度についてはなかった。

（林田恒浩）

地域ブロック担当報告

各地域ブロックの活性化を計ることを目的として優良歌集の顕彰を実施した。

優良歌集の推薦手続き（申し合せ）について整備を行った。

地域ブロックの役員推薦手続き（申し合せ）について整備を行った。

各地域ブロックの実施する短歌大会に助成金を支給して、中央幹事の派遣を積極的に行った。

（松坂弘）

編集担当報告

2004年版『現代万葉集』を平成16年9月20日に発行。編集：永平緑、鈴木明子、伊藤泓子、末継由紀子、筑波笙子、丸山郁夫、津田恵美、星野京。

時代の変遷を知る為に一つの型で編集、校正のための原稿整理の機械化が不可能なのが悩みです。名誉会員・参与・幹事・委員の諸氏にご協力、ご勧誘をお願いします。

会誌　平成16年7月1日に144号、10月1日に145号、平成17年1月1日に146号、4月1日に147号を発行した。編集は永平緑、鈴木明子、伊藤泓子、星野京。会員減少のため増ページは行いませんでした。（星野京）

広報担当報告書

日本歌人クラブの実施する諸行事の内容について主要新聞社及び短歌関係ジャーナル誌紙に広報した。（三井ゆき）

国際関係担当報告

3年に1回、国際交流大会を開いている。

来年度は開催年であるが、日本で開催したいという意見もある。

「タンカジャーナル」は年間2冊出版、世界中から自然と作品が集まってくるようにな

った。

「タンカジャーナル」から会員の作品を隔週の木曜日にジャパン・タイムズ紙上での掲載を続けている。（市原志郎）

経理担当報告

経理は出津税務会計事務所に依頼、厳正に管理、執行されている。収入の多くは会費収入であり、会員増が大きな課題である。そこで本年度からは入会金３０００円を２０００円に減額し、その内１０００円を入会者の所属ブロックの収入とした。平成16年の会費納入者は４７９９名で、新入会員の増加により昨年度に比べ若干増えている。（金田義直）

管理担当報告

平成11年４月17日付で締結した建物賃貸契約に基づき、平成17年５月１日から平成19年４月30日まで契約更新手続きをした。

日本歌人クラブのホームページは、都度修正、追加して常に新しい情報を提供していますので是非ご覧下さい。（永平緑）

ヤング短歌連盟担当報告

組織の充実、ヤング大会の開催のしかた、機関誌の発行、インターネットの活用、各地区との連携などを考慮しつつ検討を重ねた。その結果、少しずつではあるが、動きが出て来つつある。

早急に軌道に乗せるべく、各ブロックでの積極的な取り組みを、ぜひともご配慮いただきたいと念願している。（神作光一）

日本歌人クラブ中央幹事選挙結果報告

選挙管理委員会
委員長　原田清

一、日時　平成十七年五月二十一日（土曜日）
　午前十時より午後一時
一、場所　東医健保会館
　東京都新宿区南元町四
一、投票者総数　九四四名
一、有効投票数　四、五一五票
一、無効投票数　一二票
一、各候補者の得票は左の通りである。（得票数順）

一位	神作光一	五二二票
二位	星野京	四三三票
三位	佐波洋子	四一一票
四位	島崎榮一	四〇二票
五位	石黒陽子	三七四票
六位	御供平佶	三一一票
七位	中根誠	三一〇票
八位	久々湊盈子	二八五票
九位	塩野崎宏	二六六票

次点

十位	市原志郎	二五六票
十一位	梓志乃	二五一票
十二位	宮原勉	二三九票
十三位	甲村秀雄	二二八票
十四位	金田義直	二二七票

一、立会人
横山岩男、秋葉四郎、秋山佐和子、三枝英夫、中地俊夫（五十音順）

選挙風景

平成16年度決算報告書

収支計算書（平成16年４月１日から平成17年３月31日まで）

（単位：円）

科目	予算額	決算額	差　異	備　考
１．収入の部				
(1) 一般収入	(22,800,000)	(23,808,008)	(1,008,008)	
会費収入	21,000,000	21,084,423	84,423	
入会金	400,000	1,290,000	890,000	
受取利息	0	5,065	5,065	
寄付金	0	20,000	20,000	
雑収入	1,400,000	1,408,520	8,520	
(2) 事業収入	(14,640,000)	(12,374,400)	(△2,265,600)	
万葉収入	9,100,000	8,822,000	△278,000	
全日本短歌大会	3,600,000	3,552,400	△47,600	
叢書収入	1,940,000	0	△1,940,000	
当期収入合計	37,440,000	36,182,408	△1,257,592	
２．支出の部				
給与手当	5,175,000	4,331,500	△843,500	
選考料	300,000	250,000	△50,000	
万葉購入費	4,700,000	4,725,000	25,000	
印刷費	4,700,000	3,403,287	△1,296,713	会誌叢書等
発送費	2,300,000	2,287,791	△12,209	会誌と歌集
編集費	965,000	1,032,500	67,500	
表彰費	700,000	462,938	△237,062	
会議費	2,894,000	2,655,410	△238,590	
旅費交通費	4,000,000	4,241,989	241,989	
通信運搬費	1,900,000	2,030,568	130,568	
交際接待費	10,000	0	△10,000	
地域大会助成金	950,000	910,800	△39,200	
賃借料	3,300,000	3,000,210	△299,790	権利金償却含む
保険料	15,000	0	△15,000	
水道光熱費	211,000	243,018	32,018	
リース料	650,000	758,730	108,730	
消耗品費	150,000	124,884	△25,116	
慶弔費	250,000	282,403	32,403	
事務用品費	1,100,000	805,031	△294,969	
講師謝礼渉外費	600,000	475,100	△124,900	
支払手数料	800,000	778,982	△21,018	
諸会費	0	0	0	
新聞図書費	10,000	14,060	4,060	
日本歌人クラブ賞	400,000	300,000	△100,000	
資料保存費	200,000	190,586	△9,414	
コンピュータ経費	450,000	629,000	179,000	
修繕費	0	0	0	
雑費	200,000	84,000	△116,000	
予備費	510,000	0	△510,000	
当期支出合計	37,440,000	34,017,787	△3,422,213	
当期収支差額	0	2,164,621	2,164,621	

収　支　予　算

平成17年４月１日から平成18年３月31日まで

単位：円

科　目	平成16年度決算額	平成17年度予算額	備　考
１．収入の部			
⑴一般収入	(　23,808,008)	(　23,615,000)	
会費収入	21,084,423	22,000,000	
入会金	1,290,000	300,000	
受取利息	5,065	0	
寄付金	20,000	20,000	
雑収入	1,408,520	1,295,000	
⑵事業収入	(　12,374,400)	(　14,140,000)	
万葉集収入	8,822,000	9,200,000	
全日本短歌大会	3,552,400	3,970,000	
叢書収入	0	970,000	
収入合計	36,182,408	37,755,000	
２．支出の部			
給与手当	4,331,500	4,641,000	
選考料	250,000	200,000	
ブロック関連費	0	200,000	
万葉購入費	4,725,000	5,000,000	
印刷費	3,403,287	4,470,000	会誌叢書等
発送費	2,287,791	2,250,000	会誌と歌集
編集費	1,032,500	1,070,000	
表彰費	462,938	1,350,000	
会議費	2,655,410	2,264,000	
旅費交通費	4,241,989	4,244,000	
通信運搬費	2,030,568	2,080,000	
交際費	0	10,000	
地域大会助成金	910,800	1,000,000	
賃借料	3,000,210	3,240,222	
保険料	0	15,000	
水道光熱費	243,018	200,000	
リース料	758,730	760,000	
消耗品費	124,884	50,000	
租税公課	0	0	
慶弔費	282,403	275,000	
事務用品費	805,031	890,000	
講師謝礼金渉外費	475,100	500,000	
支払手数料	778,982	830,000	
諸会費	0	0	
新聞図書費	14,060	40,000	
記念事業準備費	0	0	
日本歌人クラブ費	300,000	500,000	
資料保存費	190,586	210,000	
コンピュータ経費	629,000	473,500	
修繕費	0	0	
雑費	84,000	197,000	
予備費	0	795,278	
支出合計	34,017,787	37,755,000	
収支差額	2,164,621	0	

貸　借　対　照　表

（単位：円）

科目	平成17年３月31日現在	平成16年３月31日現在	比較増減
１．資産の部			
⑴流動資産	(　62,330,829)	(　59,127,103)	(　3,203,726)
現金	244,027	153,368	90,659
定期預金	20,000,000	20,000,000	0
普通預金	21,561,302	35,058,752	△13,497,450
郵便振替貯金	18,814,106	2,355,786	16,458,320
郵便貯金	890,785	612,019	278,766
貯蔵品	16,800	78,372	△61,572
仮払金	58,009	102,606	△44,597
前払費用	745,800	766,200	△20,400
⑵固定資産	(　1,293,328)	(　1,293,328)	(　0)
電話加入権	157,600	157,600	0
事務所保証金	1,135,728	1,135,728	0
⑶特別勘定	(　0)	(　3,527,662)	(　△3,527,662)
地域交流特別勘定	0	0	0
記念事業勘定	0	3,527,662	△3,527,662
⑷繰延資産	(　0)	(　18,930)	(　△18,930)
事務所権利金	0	18,930	△18,930
資産合計	63,624,157	63,967,023	△342,866
２．負債の部			
⑴流動負債	(　24,249,156)	(　23,228,981)	(　1,020,175)
未払金	0	0	0
未払費用	0	0	0
前受金	23,569,366	22,324,191	1,245,175
預り金	627,000	830,000	△203,000
仮受金	52,790	74,790	△22,000
⑵固定負債	(　0)	(　0)	(　0)
負債合計	24,249,156	23,228,981	1,020,175
３．正味財産の部			
事務所拡張引当金	27,607,829	27,607,829	0
国際交流短歌大会引当基金	0	2,000,000	△2,000,000
地域交流引当基金	6,465,000	6,465,000	0
前期繰越金	3,137,551	4,494,164	△1,356,613
【当年度剰余金】	[　2,164,621]	[　171,049]	[　1,993,572]
正味財産計	39,375,001	40,738,042	△1,363,041
負債正味財産合計	63,624,157	63,967,023	△342,866

平成16年度剰余金処分案　　単位：円

１．当期未処分剰余金

前期繰越金	3,137,551
当期剰余金	2,164,621
計	5,302,172

２．当期剰余金処分案

地域交流引当基金繰入	2,000,000
計	2,000,000

３．次期繰越金　3,302,172

平成17年５月10日

日本歌人クラブ会長　藤岡武雄

監査報告

この度、会計帳簿書類監査の結果、上記会計報告の通り適正に処理されており事実に相違はありませんので報告します。

平成17年５月10日

監査人　川辺古一
監査人　椎名恒治

新会長

神作　光一氏

昭和６年10月４日千葉生。花實代表・発行人。平成15年より中央幹事を務める。歌集『冴え返る日』『未来都市』他。

新会長のプロフィール

昭和二十七年東洋大学在学中、二十一歳で「花實（かじつ）」に入会し、平野宣紀に師事する。東洋大学教授として在職中、『曽祢好忠集の研究』により、文学博士の学位を取得。文学部長、学長（二期六年間）を務めた。和歌文学専攻。和歌文学会の代表委員を歴任。現在、東洋大学名誉教授。

日本歌人クラブ中央幹事（推薦）を二年間務めた。日本ペンクラブ、現代歌人協会の会員、柴舟会の常任幹事代表。

著書に『曽祢好忠集の校本・総索引』『曽祢好忠集の研究』『百人一首』『八代集掛詞一覧』などがある。歌集に『冴え返る日』『未来都市』『風に鳴る絵馬』『秋の信濃路』等があり、合同歌集も数冊ある。

新名誉会長

藤岡　武雄氏

大正15年２月14日山口県生。あるご創刊・主宰。平成８年中央幹事、同10月会長就任。歌集に『うろこ雲』『千枚原』『富士百景』など９集。評論・研究書多数。

新名誉会長のプロフィール

日本歌人クラブ会長としての、あの精力的な活躍は全会員の知るところであり、ひとまずおくこととする。

藤岡武雄の名はまず近代文学、特に近代歌人・斎藤茂吉、若山牧水等の研究者として知られる。真に大きな足跡を残された。学究としてのブッキッシュな面のみでなく、実地調査に意を尽し、茂吉研究に至っては遠く中部ヨーロッパまで足を運んでいる。その結果としての啓蒙的な文芸指導としての文学散歩の面でも、やさしく、深く含蓄に満ちて、人気が高い。そして何といっても歌人・創作者である。歌集『一本の樹』を代表として、その実績は重い。歌誌「あるご」の存在も尊い。霊峰富士の麓、三島に居住。清澄で豊か。多忙な日々を滅却する趣があろう。ますますのご活躍を期待したい。

原田　清

浅田　雅一氏

大正７年３月18日長野県生。からたち創刊主宰。平成２年より中央幹事を勤める。歌集『花の音』『天の笛』『風の岬』ほか。

豊田　清史氏

大正10年11月10日広島県生。短歌と評論誌「火幻」主宰。歌集『火の幻』『幽魂』など８集。著書に『広島県短歌史』『原水爆秀歌』など。

大越　一男氏

大正11年11月14日茨城県生。昭和25年より尾上柴舟に師事、水甕入会。昭和54年きさらぎ創刊、発行人・代表。歌集『山稜』『山峡』ほか。

若くして文芸同人誌「自由像」を創刊、また「文京ペンクラブ」を創立するなど、文学青年として出発。短歌作者としては、初め短歌雑誌「響」を創刊、昭和三十八年、「次元」の編集委員となり、昭和四十年、「からたち」を創刊、主宰して今日に至っている。現在は七百名の会員を擁し、その誌面は多彩、主宰の人間的魅力や結社経営の手腕がうかがわれる。平成二年から二期（六年間）日本歌人クラブ中央幹事を務められた。上記のように歌集は多く、歌をあげる紙数はないが、浪漫性、青春性が匂っているといえよう。入門書に『初学者のための短歌実作教室』、随想集に『風の旅』『詩の棲むところ』など著作多数。日本ペンクラブの名誉会員でもある。

大塚布見子

大正十年十一月十日生、広島大学教育学部卒業。中学、高校、教育研究所長を歴任。氏はかって「広島文学」も編集、文学全般に通じこれまで三十四冊の単行本を出版。歌集は『火の幻』『幽魂』まで八冊、『広島県短歌史』、評伝『渡辺直己』『原水爆秀歌』等がある。日本歌人クラブについては生方たつゑ主事の時から入会、幹事をつとめつねに会員の入会に努力、会の発展に献身されてきた。氏の主宰する短歌と評論誌「火幻」は四十九巻にのぼり、これまで日本歌人クラブ中国ブロック代表のほか「原爆の子と折り鶴の会」会長にも選任されている。

豊原国夫

大越一男氏は昭和二十五年より尾上柴舟に書を学び、ついで短歌の指導を受けるようになって「水甕」に入社。昭和三十一年、服部直人の「自画像」創刊に参加。五十四年、直人の逝去により「自画像」終刊。その年、旧会員とともに「きさらぎ」を創刊、発行人代表として今日にいたっている。

その歌風は日常の生活に即した素材を平明に表現しようとしているが、年を重ねるとともに、おのずから自己の生を凝視する思いが作品に出ている。さらに郷里の牛久沼や画家小川芋銭に寄せた「河童幻想」など自在な心の動きがうかがわれる。近年、自作の短歌を書の作品にすることが多く、その書作展、また作品集がある。歌集は『山稜』『山霧』『山峡』など。

山口　純

第32回　日本歌人クラブ賞

平成17年3月23日午後6時から、歌人クラブ事務所にて最終審査が行われた。選考委員は藤岡武雄、大塚善子、林田恒浩、市原志郎、三井ゆき、原田清の六名。

対象歌集は推薦を得た三十数冊の歌集中左の六冊である。

田村広志歌集『島山』（角川書店）
久保田フミエ歌集『春鶯抄』（同）
晋樹隆彦歌集『秘鑰』（はる書房）
大下一真歌集『足下』（不識書院）
山田悦子歌集『ナマステ！ヒマラヤ！』（角川書店）
今野寿美歌集『龍笛』砂子屋書房

各審査委員の選になる十首の作品につき、推薦委員の推薦理由他につづいて慎重かつ鋭利な議論がなされた。それぞれの歌集について、おおよその特徴利点については、同意があった。委員の一部から認めがたいという言外の意志表示の示された歌集も存在した。六冊の歌集中三部の歌集が最終の対象として残った。そこには作品それ自体以外の諸般の理由も存在した。それぞれの歌集について純客観的な評価は不可能であれば当然の理である。新人賞にふさわしい。また、同一結社の歌集が年々受賞することの問題も提起された。しかし、優れた歌集であれば当然に問題にされるべきでないという意見が制した。歌集『島山』同『龍笛』の評価も高いものがあった。激論の末、大下一真歌集『足下』が表現力の豊かさ古刹鎌倉瑞泉寺の住職として、人生の深所をよく捉え達観のうちに人間味あふれる抒情は大方の賛同するところとなり、審査委員全員一致で歌集『足下』が今年度日本歌人クラブ賞に決定した。

原田　清

第11回　日本歌人クラブ新人賞

各地幹事のアンケートによる候補歌集32冊を、三月八日の中央幹事会に於いて、新人賞としての資格を検討（第一歌集であること、年齢が六十歳未満であること、他の賞を受けていないこと、日本歌人クラブの会員であること、但し受賞後の入会も可）の結果、21冊に絞られた。更に新人賞選考委員、藤岡武雄、松坂弘、神作光一、金田義直、永平緑、石黒陽子が選考を詰め、三月三十日の最終審査に次の三冊が残った。

河野美砂子歌集『無言歌』
佐々木佳容子歌集『魔女と少年』
里見佳保歌集『リカ先生の夏』

各委員が最も推挙する歌集の十首選をして審議をすすめる。

河野美砂子歌集『無言歌』は、ピアニストという特殊な視線で対象をみつめ、繊細さとするどい感性をもつ作品が新鮮であり、とりわけ「音」を軸にすえて短歌と音楽と自分とのつながりを独自の世界にうたいあげている、そこが優れているという評であった。

佐々木佳容子歌集『魔女と少年』は、日常の身近に取材しながらも、比喩や擬人法を使って絶えず異次元の世界との対比を試みる、そうしたところが新鮮で、意欲ある作品が目立っているとの意見があった。

里見佳保歌集『リカ先生の夏』は、みずみずしい感性で捉えられた場面、場面が生き生きとして新鮮、エスプリの効いた比喩やオノマトペが詩情をかもしている。この豊かな詩精神を育んでもらいたいという意見で一致した。

以上の審議を経たのち、選考委員全員が、里見佳保歌集を新人賞と決定した。

石黒陽子

第32回日本歌人クラブ賞・第11回日本歌人クラブ新人賞選考経過報告

第三回日本歌人クラブ評論賞選考経過報告

平成17年3月29日午後4時から、歌人クラブ事務所にて最終審査が行われた。選考委員は、文芸評論家の岩田正、梶木剛と、藤岡武雄会長、中央幹事の星野京、御供平佶。

委員から推薦された評論集は、原田清『會津八一　人生と芸術』砂子屋書房
松坂弘『定型の力と日本語表現』雁書館

の二冊であった。

原田清『會津八一　人生と芸術』は、著者の既刊の『私説會津八一』『寒燈集評釈』『鹿鳴集評釈』『山光集評釈』までの集大成の一巻で、八一の歌一首一首をつぶさに検討しつつその視点・観点を深めて来ている。特別な見方や論法を示すより、何度も何度も八一の特質を繰返すという、粘りある方法で八一論を完成させている。

深い理解に基づく創造がここにはある。會津八一への賛辞が展開されているばかりではない。厳しい批評の塩味もある。基礎的研究を背後に沈めた、頭抜けた一書である。

松坂弘『定型の力と日本語表現』は、現代が直面している定型詩の大きな変革、転換期に実作者の立場からの論が展開されており、著者独自の考察、視点がある。定型の力を近世、近現代の短歌にまで目配りして考察している。定型の力と言葉の力を具体的に分析論証している。

現役の歌人が、実作者の立場から、考え、研究した評論集として、同じ地平に立つ、実作者、指導者、歌誌主宰者、おのおのへの語りかけでもあり、啓蒙するところの多くある一冊で、高く評価されてよい。

「會津八一論」は、短歌を越えた文学になっている。「定型の力」は、歌人の歌人としての真摯な評論をよしとしたい。現役の中央幹事であった両著者であるが、別々の観点からの評価により、両著をもって、第3回日本歌人クラブ評論賞とした。

御供平佶

中央幹事職務分担表

会長　神作光一
総務――秋葉四郎・中根誠
　総会・議事録
　庶務・文書・慶弔・連絡・寄贈図書等
渉外――御供平佶・高島静子
　渉外・親睦・国民文化祭関係
　社団法人化関係
事業――島崎榮一・星野京
　全日本短歌大会及び募集
　日本歌人クラブ賞・新人賞・評論賞関係
　歌人クラブ叢書の出版
地域ブロック――市原志郎・御供平佶
　全国幹事会
　各地区大会派遣・助成金認定・大会共催・後援・優良歌集・賞状・賞品
　選定関係・役員推薦等
編集――星野京・永平緑
　会誌・現代万葉集の編集・発行
広報――石黒陽子・高島静子
　新聞・雑誌への報道・写真・記録
国際――塩野崎宏・市原志郎
　国際親善短歌大会関係
　TANKA 研究会・THE TANKA JOURNAL 編集・発行
経理――中根誠・秋葉四郎
　地域ブロック助成金支出・各種支払・会費滞納督促等
管理――永平緑・市原志郎
　事務所設備・営繕・美化・ホームページ
日本歌人クラブ・ヤング短歌連盟
　――久々湊盈子・佐波洋子
　ヤング短歌連盟・組織作り

第32回日本歌人クラブ賞

受賞歌集紹介

大下一真著

『足下』

大下一真歌集『足下』

原田　清

著者、大下一真は窪田空穂、章一郎父子、近現代を代表する歌人の系譜を継ぐ歌誌「まひる野」の現在もっとも充実した歌人です。歌集『足下』は『存在』『掃葉』に続く第三歌集です。歌集名からもおおよその推察が出来ますが、著者は仏者、僧侶です。しかも鎌倉の古刹瑞泉寺の住職です。言うまでもありませんが瑞泉寺は鎌倉後期の禅僧夢窓疎石の開山になります。六百年を優に越える歴史があります。禅者としての一真の存在の軽からざるところと言えます。あとがきの一節「『そっか』と読んでいただきたい。文字どほり〈足もと〉という意味のほかに、禅話では〈歩んだ道　行業　行状〉などの義も含まれる。また、禅語に『足下雲生ズ』とある。雲の上でも歩いていける自在さ、つまりはお覚りの境涯をこう表わす。自分はとてもとてもそのような境地にいないことは言うまでもないが、しかし、雲の上ではない、大地を歩めることを喜び、楽しんでいる。」

著者四十七歳から五十三歳に至る六年間、平成七年夏から十三年末までの作品、短歌四九六首と長歌七首からなる。

うちうちの愚痴を聞きやり送る背に日暮ま白き沙羅の花散る

蜘蛛の巣に果てたる蟬を揺らしつつ夕べかそけき風生るるらし

草木（そうもく）の放つ匂いの衰えしと思う頃山に落葉始まる

僧まれし者と憎みし者ともに一つの墓を落葉は埋む

平らかに削られしのち踏み石の踏まるるのみの長き歳月

以上の作品のみによっても、一つの事柄から深く人生に触れる抒情の世界を感じさせよう。一首目、あたたかく、深く、そして散る沙羅の花に掌を合す僧の祈りがある。四首目人間の真実をつかむ。愛憎も毀誉も所詮は終焉の彼方茫茫のうちに消え去る。しかも、喜怒哀楽に日々を過ごすのが人間である。そして五首目。禅僧の眼である。

一首一首が人間味をうちに湛えて、昇華した抒情をかなでる。

耐えることおのずと知りしという便りかそかに雪の香り籠れり

酔うほどに滚（たぎ）ち来るもの宥（なだ）めつつ僧なれば僧の影引きて行く

照らされて夜の桜が抱く闇　闇無きものは美しからず

根を地下の暗きに張りて竹林が秋のかそけき夕日を浴ぶる

蝶を寄せおのれを遂ぐる花々のもの言わぬ知恵春を輝く

百四歳九十二歳に十五歳も交じる新盆の卒塔婆書き終う

最後の作品、僧としての仕事である。特殊であるが、ありのままに記して深い思いを人生の諸相を感じさせる。二首目「僧なれば僧の影引きて行く」当り前の言辞の中に動かし難い生の根源を捉える。

全国の推薦者から送られた多数の中から、最終選考に残った五歌集、五人の選考委員の一致によって、歌集『足下』が第三十二回日本歌人クラブ賞に輝いた。選考委員の一人として喜びに耐えない。

—日本歌人クラブ賞—

受賞の辞

歌集『足下』

大下一真

大下一真氏

今般、思いがけなく日本歌人クラブ賞をいただくことになり、しばしの驚きののちに、責任の重さをじわじわと感じております。

猫じゃらしコスモス揺るぐ富士見駅過ぎつつ今年の深き悲しみ

歌集『足下』の巻末には、師窪田章一郎追慕のこの一首を置きました。

中央線富士見駅は、窪田空穂、章一郎父子が、療養や執筆に逗留するために降り立つことの多かった駅です。後に抑留されたシベリヤで捕虜のまま逝去して父や兄を悲しませた弟茂二郎と最後の別れをしたのも、この富士見駅だったそうです。平成十三年の晩秋、伊那谷からの帰路、急行は停車しない富士見駅を通過するときに、この年の四月に逝去された師のことが思われ、悲しみを新たにしたのでした。

やや感傷めいた作品かとは思いますが、あえて巻末に据えたのは、師への追慕の情に加え、空穂、章一郎の系譜を継ぐ志だけは忘れまいという、ささやかな身ながらそうした思いをこめたつもりでした。

生前からの縁により没後の山崎方代に深く関わり、「方代研究」を編集し、一昨年には『山崎方代のうた』を広くお読みいただく幸いを得て、方代研究者としてのイメージが強かろうと思いますが、それはそれとして、私は、空穂、章一郎から多くのものを学ばせていただいて、今日にいたっております。

お二人は、国文学者だという面があってでしょうが、歴史的な広い視野で短歌という形式を捕らえ、本質に錘を下ろす一方、歌壇政治的なことには無縁でした。こうした姿勢を見本として、小さな状況には動ぜず、寸暇を惜しんでさまざまなことを学び、積み重ねていきたいと思っております。それがまた、今回の受賞へのご恩返しになることだと、信じてもおります。

書生くさいようですが、かような決意を申し上げて、お礼の辞とさせていただきます。

自選十二首

簡浄に生き得ざる身に百花咲き咲き衰えて緑陰の闇

夏浅き朝生れたるカナカナか初陣武者のごとくに鳴けり

酔うほどに滚（たぎ）ち来るもの宥（なだ）めつつ僧なれば僧の影引きて行く

照らされて夜の桜が抱く闇　闇無きものは美しからず

時長く葉を落としたるかえるでと掃き終えしわれと冬に入りゆく

葡萄棚葡萄の実なきを渡る風方代のなき甲斐の国はも

厳寒の暁闇を集い坐禅するおのおのひそけき器となりて

職業は僧侶と書きて僧侶とは職業なりやと思えり　いつも

大下君セカンド六番は三振と内野フライにて今日は負けとぞ

争えば人憎むゆえ争いを避けて蔑（なみ）さる消極的と

暁の庭に水仙と梅の香のおのおのの高さ保ち競わず

猫じゃらしコスモス揺るぐ富士見駅過ぎつつ今年の深き悲しみ

第11回日本歌人クラブ新人賞

受賞歌集紹介

里見佳保歌集
『リカ先生の夏』

―豊かな時間、空間へ―

石黒陽子

第十一回となる日本歌人クラブ賞新人賞は、里見佳保氏の『リカ先生の夏』が、受賞歌集に決定した。著者は現在三十歳であり「りとむ」に所属している。この歌集は二十代の作品二九〇首がほぼ制作順に収められている。

信号が青に変わって歩き出すだれが鬼かはわからないまま
フランスの刺繍裏から見るようにわが少女期を顧ている
言い出せずたたんだ言葉灼くための炎と思う街のさるびあ
切り抜いたように静かなテスト中寒太郎来てよくしゃべる午後
のびやかな旋律にまず誘われる。機知のある比喩が客観的世界を広げて、たとえば「信号が青」と「鬼」とはその連想を絶って世相への思いが広がっていく。

フランス刺繍と少女期、言葉を灼くための炎とさるびあ、切り抜いたような静かさ、これらは比喩というより、言葉の文節によって新たな世界を創造しているように思う。一方で次の作品に出会う。

人の子を叱るつかれにしゃがみこむ階段下に光るビー玉
潮騒が銃声よりもさむざむとわれの心をうちのめす冬
積み木つむ形よくつむ高くつむとがった影がこの子を覆う
遠き海見下ろす目つきしたのちに少年くるり鉄棒まわる

さわやかな調べの内にある厳しい視線が著者の日常を思わせる。「跋文」に教師とあるから、おのずから子供に対う姿勢は真剣であろう。ここでは比喩を用いない鮮やかさがあり、前出の作品とは、ひと味違う詩情を感じさせる。もう少しあげると、集中の終わりに近い作品群である。

鳥おらぬ鳥籠のなか月射して明治の頃のままの静寂
時が経つほどに花びら散らしゆく祖母のしめたる葉桜の帯
低く低く雪雲空にたちこめてけもの撃つ音よく響くなり

明治のおもかげのある鳥籠、祖母のにおいのする葉桜の帯、みな著者のルーツを物語るもの、榛名山を仰ぐ風土に育まれた時間は厚く、この集の奥行きをふかめていると思う。

またオノマトペと比喩を柔軟に取り入れる巧みも特長といえるだろう。比喩のことは先に書いたのでオノマトペをみよう。

美白液ぱぱぱやぱやと頬にあてふと思い出すみずいろの日々
ぴこたぴこた蛙とび跳ね万物にスタッカートの符号をつける

どちらもオノマトペによって新鮮な躍動感が生まれている。「あとがき」に「ささやかなものと向き合ったり、寄り添ったりすることから生まれる豊かな時間や空間を広げてほしい。」とありその時間、空間を広げてほしい。歌へと導く三枝昂之氏の跋文が著者の歩みを懇切に伝えていて親しめる第一歌集である。

―日本歌人クラブ新人賞―

受賞のことば

里見佳保氏

「ノート開いて」

里見佳保

日本歌人クラブ新人賞をいただき、ありがとうございます。自分の小さな手帳に書き込まれていた詩が一冊の本になり、このような賞までいただいてとてもしあわせです。

はじめて歌集というものを見たときの余白のまぶしさは忘れられません。いっぱい引き算をして大切なものをほんの少し残すという贅沢。いつか自分の歌もやわらかい余白の上に置いてみたいと思っていました。『リカ先生の夏』はそんなささやかな希望から生まれました。

偶然にたどり着き、踏み入れた短歌の世界は最初小さな容れものだと思っていたのに、まるで森のようでどこまでも広くて深いものでした。そのなかで時に迷い、歩き、走り、しゃがみこみ、遠くを見たり、一つにこころ奪われたりすることが私にとってとても大切なことになっていきました。言葉に寄り添ったり、格闘したり短歌に注ぐ時間や体力や気力はその時その時で異なったけれども、細々とつくり続けてくることができ、よかったと思っています。短歌と関っていることで季節の移っていく様子が日々の楽しみとなり、ものの名前を知りたくなり、いままで気づかずに通りすぎていたものの前で立ちどまろうとする自分に変わっていきました。自分がしていること、つくっているものへの親しみがもてることも、またありがたいことだと思います。この世界に導いてくださった先生や一緒に歩んでいく歌の仲間や今回の場を与えてくださったクラブ関係者など、さまざまな方に感謝いたします。

これからも世界に、時に、人々に対して私なりに心を傾け、思いや願いを表す言葉を研いでいきたい、言葉を楽しみつつ、しかし畏れを抱きつつ短歌をつくり続けていきたいと考えています。また今日も一首つくろうとする力を持ち続けることが、どんなに大切でどんなに難しいかということを思ってノートを開いています。

自選十二首

月見えぬ真夜の浴室ひんやりと海色タイル足裏を刺す
らりらりと熱くわき立つ湯のなかに息つぎもせずたまごは踊る
切り抜いたように静かなテスト中寒太郎来てよくしゃべる午後
椿折るほどの高さに手を伸ばし吉井勇の歌集を選ぶ
病める子の枕のくぼみそのままに廃院となる重田小児科
ひらかれた手紙のようなひまわりの丘へとうでをとられつつ行く
ああ、ぐうを出してよかったこの次は百年経ったら交代しよう
対岸はわずかに早く暮れゆきぬとりのむね肉色の夕空
鈴虫を封じた帽子置いたままサーカスの子はこの地を去れり
ボートより銀貨こぼれて沈みゆく水中都市の流星として
半日は電話鳴ることなく過ぎて梅の香りが膝まで溜まる
あの夏の想い出はまたきっと咲く掌のなかひまわりの種

第32回日本歌人クラブ評論賞
受賞評論著書紹介

原田　清著
『會津八一　人生と芸術』

御供平佶

原田清著『會津八一』「人生と芸術」は、歌人として、書家、東洋美術史等に独自の学問世界を切り開いた「秋艸道人・會津八一」の人生と芸術を語る一冊である。

著者は平成八年に『私説會津八一』、十年に『會津八一鹿鳴集評釈』、十三年に『會津八一寒燈集評釈』、十四年に『會津八一山光集評釈』を刊行し、本著は著者の會津八一研究の集大成の一巻と言えよう。

「序章　鐘の音」から、最終章まで二十四編の一遍、一遍に語られる、八一の歌人、書家、教育者、東洋美術史家としての人生がまのあたりに展開される。その多彩な学問・芸術との出会い、研究、成果が、巧みな筆致で余すなく語られ、その都度のエピソードが楽しく悲しく、読者を引込んで止まない。

一の「正岡子規」では、八一の文学の出発である十代での俳句が語られる。旧制中学五年の十九歳から、すぐれた俳論を発表。短歌でも郷土新潟の良寛和尚の作品の万葉調を発見する。上京して兄と神田の下宿中、すでに病床の子規をたずねて俳句を語り、良寛を紹介し、良寛が世に知られることになる。

二の「閨秀画家」では、失恋が語られ、傷心の旅が奈良との出会いとなる。また、一茶研究により、一代の俳人を世に紹介する。三の「学規」では、坪内逍遙の招きにより明治四十三年九月、早稲田中学の英語教師となる。大正三年開設の「秋艸堂」に掲げたという「学規四則」の本文だけ引用するが、

一、深くこの生を愛すべし
一、省みて己を知るべし
一、学芸を以て性を養うべし
一、日々新面目あるべし

これだけ読んでも心に響く教えである。

一二の「三人の理解者」には、八一が四十四歳で出版した第一歌集『南京新唱』は、当時の歌壇にはなかなか認められなかったが、斎藤茂吉は良寛の作品とともに八一の短歌が写生によるものであるところに注目。若き画家の中村彝は病床にあった。八一の歌の悠久な自然、大自然の幽玄に包まれると述べ、「こんどは俳句の方を出して下さい」と便りを結んで、日をおかずに世を去る。

まがつみはいまのうつつにありこせど踏みしほとけのゆくへしらずも

他一首の作品が解し得ないと書簡でたずねた療養中の吉野秀雄は、踏まれていた天の邪鬼だと説く、返信に感動して以降師と仰ぐ。

一三の「教育者」での、早稲田旧制中学教頭時代、中学隣接の後の犬養首相の屋敷に、鳩の巣に仕掛けをして鳩を捕まえようとして忍び込んだ生徒を、老執事が捕まえ、会津教頭に処分を迫った。国家を預かる犬養先生が国の犠牲になろうとしているご時世に鳩一匹位なんじゃと、追い返し、生徒には、「おまえは教室に帰れ」の一言だけだったという。

終章近く、東洋美術の研究家として、法隆寺金堂の壁画を取り外して保管し、金堂には現代の画家に描かすよう提案していたが聞き入れられず、ついに漏電で焼失したという。

八一の人生と芸術を丁寧に深く分析、研究し、分かりやすく解きあかされた八一像が温かい。既刊の四著ともども、著者の誠実な人柄に触れる一巻である。

―日本歌人クラブ評論賞―
受賞のことば

原田清氏

原田　清

このたび、拙著『會津八一　人生と芸術』に第三回日本歌人クラブ評論賞が与えられました。この上もない栄誉と有難く、心から感謝とお礼を申し上げます。書物には書物の運命があります。私のこの一冊は本当に恵まれた星の下に出版されたと思わずにはおられません。世には多くのすぐれた研究書もあろうかと思われます。その中にあって、選考に当られた諸先生の眼に留まり、ご推薦を賜ったことは真に希有のことと言い得ましょう。襟を正して拝受致しました。會津八一という歌人を知り、作品に触れてから幾程の歳月を経たことでしょう。さだかではありませんが二十代半ばではなかったかと思われます。茫茫五十年に及ぶことになります。しかし自覚的に取り組んでから十年程かと思います。表記が全てかな書きである故に、解し難い作品にしばしば出会いました。読み解くと言う基礎的な作業に取り掛ったのです。その間に研究書『私説會津八一』を出版しました。平成八年（一九九六）のことです。そして、歌集『鹿鳴集』評釈　平成十年（一九九八）、『寒燈集』評釈　平成十三年（二〇〇一）、『山光集』評釈　平成十四年（二〇〇二）と三部作の評釈を完成させることが出来ました。本著はそれらの基礎的研究を踏まえて會津八一というさまざまな学芸の分野に秀でた近代の巨人の足跡をたどりました。短歌、随筆、書、研究などなどと共に教育者としての八一の姿を先達の著書によって知り、大きな感動を得ました。得体の知れないデモーニッシュな面がやや拡大されて語られていますが、破門、出入り禁止などなどの言辞にもかかわらず、多くの門弟、知己が跡を断たなかった事実は八一という人間の秘められた魅力を物語っていると思います。当然逆鱗に触れて、再び見えなかった方々もあったでしょう。それも人生の一面です。八一の作品に縁を得ての本著が、得がたい賞を受けたことの喜びを胸ふかく感ぜずにはおられません。著書と共に著者としての幸運を思わずにはおられません。

私の好きな會津八一のうた

かすが野に押してるつきのほがらかに秋のゆふべとなりにけるかも
ほゝゑみてうつつごころにありたたす百済ぼとけにしくものぞなき
はつなつの風となりぬとみ仏はを指のうれにほのしらすらし
たび人の目にいたきまでみどりなる築地のひまの菜畑のいろ
ちかづきて仰ぎみれどもみ仏のみそなはすともあらぬさびしさ
おほらかにもろ手の指をひらかせておほき仏はあまたらしたり
毘樓博叉（びるばしゃ）まゆねよせたるまなざしをまなこにみつつ秋の野をゆく
ふじはらのおほきさきをうつしみにあひ見るごとく赤きくちびる
おほてらのまろきはしらの月かげを土にふみつつものをこそおもへ
あめつちにわれひとりゐて立つごときこのさびしさにきみはほゝゑむ
観音のしろきひたひに瓔珞のかげうごかして風わたるみゆ
野のとりのにはのをざさにかよひきてあさるあのとのかそけくもあるか

第32回日本歌人クラブ評論賞
受賞評論著書紹介

松坂　弘著
『定型の力と日本語表現』

御供平佶

松坂弘評論集は、『定型空間への助走』などの後、平成十二年刊行の『定型表現の現場から』があり、それ以後に執筆のものに収録もれのものを加えて、今回の『定型の力と日本語表現』が纏められたものである。

著書は、短歌にかかわった十四、五歳の時から五十数年、いつも表現とは何か、伝達とは何か、そして日本語とはという三つの柱を考えながら、ものを書きついで来たという。

巻頭の「定型の力と日本語表現」では、最近の日本語ブームから、短歌を声に出して読む日本語が生かされた音読の効用が語られ、作者の肉声で短歌を伝え、読者は肉声で聞くCD短歌などにも考察が及ぶ。

次の「携帯電話と短歌」では、

・携帯電話持たず終らむ死んでからまで便利に呼び出されてたまるか　斉藤　史

を実例に、電脳社会の進行が人間の感性や思考力を弱めたり歪めたり疎外することはないかと危ぶむ。さらに日本語の問題で「主語」を巡った国語学者の研究と赤彦作品などに触れる。佐佐木幸綱や永田和弘の語る「読み」の問題につき、外山滋比古の理論から、

文学作品の鑑賞や批評にあたって、作者の意図からすこしはずれても誤りになると考える態度は、近代読者の出現によって、暗々に否定される…

が、引用され「読者の読みのずれを恐れない心」の大切さが語られる。「原則として誤読などありえない。さまざまな読みがあって当然のことで、誤読など恐れない心で表現すること」だとするこの姿勢に同感である。

つぎに「定型は繰り返し蘇生する」では、表現者が試行ののちに定型に蘇生すること。意味の追求や散文化におちいらず、基本に帰ることの大事さが繰り返しのべられる。

「現代短歌にとって都市詠とは何か」では「東京は不思議な魔物（モンスター）だ」を一つの結論に、多くの歌を引いて都市「東京」が語られる。

物でありながら心を抱え込んでいる。そして、空間を抱え込んでいる。政治や経済や文化の中心であり情報の発進基地だから魔力に満ちているのか、というとそればかりではない。そこが何とも人を引きつけるところなのである。

これは、生活の場、住まいの拠点とし二十三区にこだわり続ける著者の述懐であろう。

「日本文化の国際交流について」の結論を。

近年、情報技術の国際的な発展に合わせて、英語を第二公用語にとの議論もあるが、私はその前に、日本語のよさ、日本文化のよさをもっと積極的に世界にアピールすることの方を急務と考える。

と述べるなど、短歌の持つ魅力について再認識することを提唱し、時代を踏まえた短歌の未来への考察として評価される。

実作者の立場から論じる著者は、現代短歌の第一線に立つ作家であると同時に、後読の作者たちをリードする、指導者でもあるが、その語り口は、高い位置から後進にものを教えようとする態度ではない。素直に肩をならべて研鑽し合う、謙虚な態度が、底流するところが松坂歌論である。更に、著者の論は集を重ねるたびに深く掘り下げられている。

―日本歌人クラブ評論賞―
受賞のことば

松坂　弘氏

松坂　弘

このたび、第三回日本歌人クラブ評論賞を戴くことができ嬉しく思っております。

この評論集を支持してくださった方々および選考委員の皆さんに心より感謝申し上げます。

それと共に、私にしばしば文章を書かせてくださった総合誌の編集者のみなさんにもあらためて心より感謝を申し上げます。

今度の評論集の内容は、以前に出しました二冊の評論集と同様に、短歌表現における定型と言葉の問題について論じております。

この問題は古くて新しい、いわば短歌にとっては永遠につづくであろう問題です。それは何故かというと、言葉は時代とともに絶えず変化を繰り返しているからです。

短歌定型というものがどうあるべきかについては、既に江戸時代の歌人たちが様々に論じています。

今度の評論集に江戸時代の歌論について考察したところがあります。よく読まないで奇異に受け取った人もいたようですが、落ち着いてよく読み返してください。

定型意識や修辞理論などいま現代の我々が問題にしている事柄の大方はもう江戸時代に出尽くしていることをわたしは考察し、紹介し注意を喚起しようとしているのです。こうした背景を踏まえて、近代短歌のスタート地点はすでにここにある、とさえ言う人がいるのはそのことに因っています。

わたしもそうした言説を支持する立場の一人なのです。

さて、この文章の冒頭にも触れましたが今度の評論集の文章は、そのすべてが総合誌の編集者に求められるままに書いたものばかりです。

これからは自分が年来かかえこんでいて書きたいテーマ、書かなくてはならないテーマ、についても書きたいと願っております。

例えば、中世から近世にかけての歌論の読み直し、歌論の原点とも言うべき歌合わせの判詞の研究など、書きたいテーマが山積しています。

木下長嘯子研究も中断したままですし、島木赤彦研究もまだ緒についたばかりです。とにかくいまのわたしは何よりも時間がほしいです。お陰様で今年の秋には元気に古希を迎えます。

そしていくつかの仕事が定年を迎えます。そうなると自分の時間がこれまでよりとれるかな、と密かに期待しているところです。果たしてどうなることでしょうか。

いずれにしても、私に残された時間はそう多くはありません。とにかくマイペースで仕事をつづけたいと願っております。

また、今回の受賞に価する仕事をさらに積み重ね、この賞のステータスを一層高いものにすべく寄与することも受賞者の役割かとも考えております。

皆さんの一層のご支援ご鞭撻をこころよりお願い申し上げ、お礼のご挨拶とさせて戴きます。

皆さんどうもありがとうございました。

作品

現代万葉集に参加された方の中から作品を依頼しています。

吉村睦人　通勤　――――――東京

羽沢コーポレイトといふが建ちてをり土屋先生が菜園つくりしはこのあたりならむ
ガードレイルに花瓶結はへて活けてあり昨夜交通事故のありしはここか
白雲木の花咲く下に過ぎし日のある瞬間のよみがへりくる
心臓の手術をしたる病院を車窓に見つつ日々通勤す
歌人クラブの事務所に通ひしを思ひつつ日々通り過ぐ五反田駅を

秋葉四郎　婚姻色―佐渡にて―　――――千葉

賀茂湖よりつづく雪山ゆくりなくスイスレマン湖あたりしのばす
婚姻色いでたるままに剥製となりゐる朱鷺や永久の悲しみ　「緑」
一日の心鎮めてただひろき海に小さく赤き日沈む
朝雨の痕ある島の道辺には雪割草の群落しづか
いしぶみは過去の記念と言ふなかれここよりわれの未来始まる

蒔田さくら子　憂ひの春　――――――東京

共に観しひとりの亡きを惜しみつつ歩を止む桜並木の半ば
空をさす枝にひしめき重厚のはな立ちあがり咲く八重桜
こんなにも嫌はれゐるを知らざるは傲りとみるや反日のデモ
それぞれの持てる言分それぞれに一理のありて折合ひつかぬ
平らかな春とならざる予感ありきわらわらざわわ根刮ぎ揺ぐ

青田伸夫　松の芯　――――――神奈川

葉桜の木立に風のわたるとき花なき萼ひとしきり散る
午睡より覚めたる吾はさしあたり胸郭ふかく息をすひこむ
時のながれ緩急ありとは思はねど昨日また今日瞬息にすぐ
いたましき鉄道事故はオペラ歌手志望の若きいのち散らしぬ
傘松のみどりを抜きて松の芯競ふともなくにぎはしく立つ

林丕沙子　立夏　――――――東京

柞の木原に沿ひて在り通ふリハビリへの道も八年目はや
腰椎の骨折も八年在り経しかしどろもどろの九十四歳
病身を互に労り合ひにしは一昨昨日にて今朝友は亡き
立夏のこゑ聴くかぐはしさ年毎に賜ふふるさと駿河の走り茶
肥大なる鞘状苞の肉穂花序棕櫚の幹頭にこぞれるが見ゆ

竹村紀年子　夜の雨　――――――愛知

花びらのやがて吹雪かむ曇り濃くなりゆくままに桜あかるし
虚と実の段差を越えて劇場の外の夜雨にわが傘ひらく
活気ある市と煽られ都心なるビルのはざまに観覧車立つ
光の繭を吊る観覧車つかのまを夜ぞらの人となる影容れて
目守る燈に微か芯あり夜の窓を鎖して花散らしの雨を拒めば

森佐知子　気負い解きたり　――――埼玉

柔和なる或いは鋭きまなこ持つ小鳥屋の鳥にわれは見らるる
玉の浦、月の輪美しきネーミング弥生の庭に椿息づく
天命と対きあうような二日間続きし葬りの気負い解きたり
テレビ、ラジオ株騒乱の旬日を他人事としてたのしむわれは
店先に林檎を選ぶ黄昏は果皮長く剥きし母の顕ちくる

温井松代　さくら風　――――――神奈川

地を擦るほどにも枝垂るる花の紅みだしてさくらは風に随ふ
濃き淡き枝垂桜の揺るるさま広生に佇ちてうち眺めつも
篁をそがひに烟り咲く花を終の日のわが浄土となささな
花を褒めをんなひとりの過ぎてより昃る竹の梢わたる風
遠つ代のこゑ聴きてゐる風のなか封じて永きわが生とおもふ

島隆允　妻木晩田遺跡　――――――鳥取

春の日を溜めてぬくとし大小の四隅突出墳丘墓群
環壕にかこまれ建てり住居群弥生の千の風吹きわたる
妻木晩田の弥生の空の高くして星屑ふり来ん卑弥呼の肩にも
泣き出さんばかりの顔し盾持てる兵の埴輪の出で来し三号墳
遺跡の丘ゆ振りさけ見れば潮騒のはるか向うに拉致の国あり

大野景子　台北　――――――愛媛

万能の女神媽祖神　風を聞く耳の尖りや雨滴見ゆ
化粧濃く立つ台北のをんながみ暗き御堂に発光始む
弁柄の練り塀沿ひは人気なし記憶の果てに花連の漁港
仏塔は風吹く方へ傾ぎつついびつな春の日だまりに映ゆ
宋美齢所有のホテル赫々と歳月越えて眩しさの中

吉岡恭子　九十五歳の義母の春　――――神奈川

あの人は誰と指さし己が息子と気づきし義母の口元ほぐる
耳元に桜の話題きく義母の表情かはらず目差うつろ
大阪の狐うどんが食べたいてふ義母その椀を干しし忘る
倒れ臥す姿勢のままにて義母ねむる頸静脈の動きかすかに
より薄くなりたる瞼のその下をくるりと義母の眼球うごく

鈴木恭子　雪のソウル　――――　静岡

雪の舞ふソウル市内を車窓にて眺むる景色に酔ひてたそがる
南大門市場の中の人ごみに異国の言葉に親しみの湧く
雪やみて王宮の庭薄化粧ドラマの舞台に思ひの深し
「冬ソナ」のドラマの並木歩みつつ想ひをはせるチュンチョンの島
「友情」の観客席にこみあげて日韓友好役は果たせり

井上登志子　暖簾を降ろす　――――　大分

嫁ぎきて旧き商家を守り来し歳月長し子のなき媼
老いてなほ働くのみの日を過し百年つづきし暖簾を降ろす
ひえびえと広き旧家の土間にある商標しるき甕の類は
おびただし古き商家の骨董品時の光に今晒されり
麹屋のふるき室倉傾きて青きシートを風のめくれる

堤　佳子　淡き花びら　――――　岡山

屹立の斜張橋より急カーブ螺旋を降りて立つ岩黒島に
橋脚の岩黒島の風ひかり丘に条なし揺るる蚕豆
そら豆の淡き花びら震わせてマリンライナー大橋を過ぐ
人気なきみ寺の庭に盛りいる白木蓮のみせるアンニュイ
霧しまく川に対いて少年のひたむきに吹くトランペットよ

引田正男　さくら　――――　群馬

さくら祭の企画成りしがこの年の開花は何時と思案果てなし
昨日かしこ今日はここぞと報道のテレビに見入る桜前線
山に咲く「かたくり」さへや町おこし春の祭の主役ともなる
桜花のごと散れと訓され征きたれど花なき北土の虜囚三年
過ぎ去りの善きも悪しきもわが裡と花の散りたる葉桜の下

松木　基　トンネル栽培　――――　山梨

もろこしのトンネル栽培盛りなりきらめくビニール園地を蔽ふ
花ざかりの五色椿に鵯の来て暫くは小枝ゆるがす
柔と剛ひそめ動かぬ竹むらの屋敷神様めぐりて繁る
甲府城址の復旧なりし城壁の白きがまぶし春の陽かえす
あるなしの風に静かな音ならす一蓮寺の風鐸ゆうらりと揺れ

安部洋子　春日光　――――　島根

大輪の牡丹花丘に満ち満ちてわれには遠き島の春なり
ひとつ蕾ほころびてゆく春日中ひかりはただにゆれつつ寂し
坦々と明るくひろがる牡丹園海鳴り届きし冬日もありき
春日中崩れてゆける牡丹のやはらかき闇うけとめてをり
花びらの乱れ崩るる牡丹の一途の春の終焉を見つ

宮島金作　越生梅林　――――　埼玉

墨の痕木理に浮ける大き標見つつ通ひき川を隔てて
童にて標に読みき墨書せる武州新月ヶ瀬豊楽園の文字
川隔て読みし標も今は失せツアーの客に混める梅林
駒下駄に矢立携へ訪ひ来にし人ら今亡し梅は匂へど
せせらぎに頻散る梅花数増せり鰍が黄なる卵産むころ

水谷洋子　レクイエム　――――　静岡

校門の新島襄の良心碑　街灯たより手帖に記す
同志社の春のグラウンドまぼろしは駆ける韋駄天わがラガーマン
亡きひとの覇気甦る紫木蓮雨にうたれてむらさきひらく
櫻前線夫の母校のグラウンドに二ひら三ひら散れるレクイエム
観光のバスの座席につむるとき追いかけてくる同志社の森

水田　明　原郷　――――　兵庫

げろげろげへのげろげろげ熟田のぞくはうちの爺さまよ
げろげろの蛙の声を聞きながら爺さま婆さまは里に育ちき
田の中の蛙呑まむと青大将するする寄れば蛙うごかず
暗闇にぽつりぽつりと灯火見ゆあれは人家かはたや鬼火か
みまもればそこともわかぬ闇にして空一面に星はしたたる

持丸雅子　暗緑の沼　――――　群馬

橋頭堡なる語彙ひとつ得しのみに春暑き日の読み捗らず
病ひにも溶暗といふ感覚のあらむか淡く癒えてゆくべし
花々のいつせいに溢れ彼岸との境界線をまた見失ふ
一度のみ連れてゆかれし牛蛙棲む暗緑の沼を記憶す
在りし日の夫の秘密の釣場にてもはや二度とは辿り得ぬ沼

下南拓夫　白き花の咲くころ　――――　神奈川

来宮は木の宮にして境内の二千年の楠芽ぶきて若し
周囲二十六メートルの楠が大注連縄をかるがると見す
白き花の咲くころよしと山荘に招かれてはるか海を見おろす
海ぞいにせまる山なみ白花の季みじかくも勢いのあり
霧晴れて森の木の花謳う花音楽のごとく白くひろがる

山地通夫　賞味期限　――――　北海道

食品の賞味期限のうるさき娘　何時しか妻も吾も過ぎゐる
楢の樹液吸ひて雄の鍬形のおのが存在つねの戦ひ
凍裂に削がれて割れし太き枝寒月にしろく浮き立ちて見ゆ
樹の根元に点々雪のゐくぼ見え残雪割りて芽吹く黄水仙
あけがたを音響かせてゆく単車若きが飛ばすおのれの愉悦

CLUB NEWS

結社及び個人的行事以外のニュースをお待ちします。

日本歌人クラブ平成17・18年度

全国役員名簿

地域ブロック別名簿

□北海道地域ブロック

参　与　小国孝徳、松田一夫、山名康郎

幹　事　内田弘（代表）、足立敏彦

道委員　横尾幹男、志田敏彦、細井剛、黒沼友一、笹原登喜雄、村井宏、湯本竜、山本司、吉田秋陽、野江敦子、山地通夫、飯田哲雄、押山千恵子

担当幹事　永平緑　市原志郎

□東北地域ブロック

参　与　片山新一郎、結城晋作、波汐國芳

幹　事　高橋宗伸（代表）、福井緑、柏崎驍二、高貝次郎、渡辺礼子、酒井義勝

県委員　三川博、稲垣道、菊澤研一、徳山高明、八重樫欣子、塔原武夫、菅原恵子、斎藤博、高橋光義、井上菅子、栗城永好

担当幹事　島崎榮一、中根誠

□北関東地域ブロック

参　与　鶴見豊吉、上野勇一

幹　事　横山岩男（代表）、勝井かな子、高橋誠一

県委員　飯島由利子、大塚洋子、秋葉静枝、小田倉玲子、片岡明、秋草愛子、小勝明、島内美代、堀喜恵子、今泉勇一、阿部栄蔵、熊谷淑江、内田民之

担当幹事　中根誠、石黒陽子

□南関東地域ブロック

参　与　杜澤光一郎、谷井美惠子、大塚布見子、江畑耕作、土屋正夫、五喜田正巳、吉田耕士、川端弘、広川義郎、永平利夫、沼波万里子、青田伸夫

幹　事　金子正男（代表）、伊藤宏見、日野原典子、丸山郁夫、飛高敬、平林静代、黒岡美江子、小田朝雄

県委員　清水正子、山中登久子、温井松代、小林邦子、岸本節子、吉野裕之、稲垣紘一、中西洋子、利根川発、浜口美知子、室田陽子、金子貞雄、佐田毅、石田照子、小林幸子、白石トシ子、山本鳩世、前田えみ子、鶴岡美代子、塩入照代、黒沼春代

担当幹事　塩野崎宏、秋葉四郎

□東京地域ブロック

参　与　椎名恒治、石本隆一、須藤若江、高松秀明、池田まり子、松坂弘、鈴木諄三

幹　事　三枝英夫（代表）、尾澤紀明、鈴木明子、中根三枝子、松原信孝、中地俊夫、磯田ひさ子

都委員　伊藤泓子、末継由紀子、筑波笙子、森本平、秋葉雄愛、岡豊子、鈴木英子、藤井徳子、今枝敬昌、福島久男、福岡薫、秋山佐和子、西川修子

担当幹事　秋葉四郎、御供平佶

□甲信越地域ブロック

幹　事　疋田和男（代表）、望月幸朗、田中要、山村泰彦

県委員　川崎勝信、久保田幸枝、宮脇瑞穂、小山豊、永井保夫、福島徹夫、樋口よね、石川ちかゑ、古屋弘、草間馨子

担当幹事　石黒陽子、佐波洋子

□北陸地域ブロック

参　与　津川洋三、久泉迪雄

幹　事　米田憲三（代表）、市村善郎、永井正子、江沼半夏

県委員　四辻利弘、畠山満喜子、尾沢清量、高橋協子、田中利喜太郎、古谷尚子

担当幹事　高島静子、久々湊盈子

□東海地域ブロック

参　与　小瀬洋喜、山田震太郎、三宅千代

幹　事　倉地亮子（代表）、大平修身、片山静枝、小川恵子

県委員　星谷亜紀、山口静子、須永秀生、青野里子、柚木新、村松秀代、杉本容子、斎藤すみ子、立松滋子、青木陽子、小塩卓哉、黒田淑子、後藤すみ子、筒井紅舟、中野たみ子、橋本俊明、東長二、大井力、谷口泰造

担当幹事　佐波洋子、星野京

□近畿地域ブロック

参　与　奥田清和、米口實、埜澤宏、東井富子、島本正齊、木下美代子、林善衛、中野照子、川口汐子

幹　事　楠田立身（代表）、神谷佳子、小西久二郎、安田純生、松岡裕子、筒井早苗、井谷まさみち

県委員　小田美慧子、田中成彦、大西公哉、本土美紀江、松本有司、楠田智佐美、西海隆子、高蘭子、石井和子、松山馨、渡辺茂子、西田泰枝、扇龍子、中野昭子

担当幹事　御供平佶、島崎榮一

□中国地域ブロック

参　与　岸本好晋、小林貞男、川野弘之、中西輝麿、音羽晃、大寺龍雄

幹　事　小見山輝（代表）、村澤徳市、池本一郎、加藤嘉昭、中島義雄、村上照男、中川健次

県委員　高木京子、大東一子、荒井玲子、西尾憲治、石井絹枝、鈬川兼光、安部洋子、神門恒子、落海としこ、永戸関夫、能見謙太郎、下村とし、岡智江、古玉從子、東木の實、山田羊三、新田隆義、小西眸、太田玲子、大橋智恵子、伊藤玲子、又野蓑、二宮信子、岡田令子、森元輝彦、吉武久美子、赤梨和則

担当幹事　久々湊盈子、永平緑

□四国地域ブロック

参　与　西川喜代水

幹　事　水落博（代表）、斉藤祥郎、門屋敏子、市川敦子

県委員　中井慶子、浜本芙美、兵頭なぎさ、山地みさを、北岡昌子、三井英美子、稲暁、今泉操、土居さと、尾形冴子、吉田みのる、前田充、宮久保美恵子、京元公子、坂口光子、小野亜洲子　西岡瑠璃子、豊島未来、梅原皆子

担当幹事　市原志郎、高島静子

□九州地域ブロック

参　与　草野源一郎、鶴田正義、園田節子

幹　事　上川原紀人（代表）、岡口茂子、日野正美、平山良明、高尾由己、仁本理子

県委員　浦岡薫、大津留敬、栗林喜美子、下野恵助、中村重義、花田恒久、安武昭典、山本陽子、中西信行、江副壬曳子、江頭洋子、福崎定美、管野多美子、八坂俊行、長野燁子、伊勢方信、吉田豊、東郷良子、玉城洋子、楚南弘子、新里スエ

担当幹事　星野京、塩野崎宏

事務所夏期休館のお知らせ

8月15日～19日

大会予告・報告

平成十七年度日本歌人クラブ 近畿短歌大会

と　き　平成17年9月17日（土）午後一時～五時

ところ　午後五時半懇親会（自由参加）
大阪弥生会館二階六甲の間
大阪市北区芝田町2―4―53
TEL　06―6373―1486
JR大阪駅、阪急・地下鉄梅田駅から徒歩五分

主　催　日本歌人クラブ

後　援　毎日新聞大阪本社

講　演　「短歌の創作と批評」神作光一

授賞式

選　者　石井和子　井谷まさみち　小田美慧子　大西公哉　神谷佳子　神作光一　楠田立身　楠田智佐美　高蘭子　小西久二郎　田中成彦　筒井早苗　西海隆子　本土美紀江　松岡裕子　松本有司　松山馨　御供平佶　安田純生

賞　日本歌人クラブ賞　毎日新聞大阪本社賞　秀作賞　選者賞　入選

〒670-0843　姫路市城東町清水13―7―404　楠田智佐美方
TEL　0792―85―1695
日本歌人クラブ近畿事務局

日本歌人クラブ 第九回全九州短歌大会

日　時　平成17年10月16日（日）正午より

会　場　小倉リーセントホテル（旧ひびき荘）
（TEL　093―581―5673）
北九州市小倉北区大門1―1―17
（JR西小倉駅より徒歩3分）

応募作品　一人三首まで可（新作品未発表のみ）

出詠料　一首につき一、〇〇〇円
詠草集は全応募者に配布します。
大会参加者は当日、他は後日お届けします。

投稿用紙　四〇〇字詰原稿用紙。☆右半分に作品を。☆左半分に郵便番号・住所・氏名・電話番号と出・欠（大会・懇親会・リーセントホテルに泊まる人は宿泊）を記すこと。
※欠席者も受賞できます。

応募方法　出詠料・懇親会費・宿泊料は、郵便為替にて作品に同封し左記に。

送り先　〒806-0045　北九州市八幡西区竹末1―23―31　日本歌人クラブ全九州短歌大会事務局　下野　恵助
（TEL　093―642―4236）

応募締切　平成17年7月30日

表　彰　日本歌人クラブ賞・朝日新聞社賞・短歌新聞社賞・日本歌人クラブ九州ブロック賞・各選者賞等多数

選　者　星野京　伊勢方信　浦岡薫　江副壬曳子　大都留敬　菅野多美子　栗原喜美子　江頭洋子　上川原紀人　新里スエ　楚南弘子　高尾由己　玉城洋子　東郷良子　中西信行　長野燁子　中村重義　仁木理子　花田恒久　日野正美　平山良明　福崎定美　八坂俊行　安武昭典　山本陽子　吉田豊
日本歌人クラブ九州ブロック優良歌集等の表彰を併せて大会当日。

入選発表

授賞式

講　演　（交渉中）

☆懇親会参加費　六、〇〇〇円

☆当ホテル宿泊費　八、〇〇〇円（朝食含む）

◎注　申し込み等は、応募詠草送付と共に願います。

実行委員長　岡口茂子

タンカ・ジャーナル

タンカ・ジャーナルの意味

塩野崎宏・椎木英輔

初期のタンカ・ジャーナルにはあったが、最近みられなくなったものに、英語以外の外国語による短歌の翻訳や紹介がある。古い号のタンカ・ジャーナルをひもとくと、ウルドゥーやハングルによる短歌翻訳がみられ、当初から編集に携わってきたものには、ある種の懐かしさが戻ってくるのを感じる。編集に当たるものは、英語こそ知識があるものの、これらの言語については全くの文盲であるから、校正をしなくても済むように、原稿を実際上写真版にしてもらったものである。

それが今はなぜ無くなったかといえば、結局はそれぞれの言語による短歌の翻訳をみたいという需要が少ないからだということに尽きよう。現在、英語以外の翻訳は、林宏匡博士によるロシア語やドイツ語の翻訳、それに結城文さんによるフランス語の翻訳がたまにみられる程度で、寄稿は圧倒的に英語が多い。

これはある意味で当然なので、英語が実質的に世界の共通語となってしまっている現在、英語で紹介すれば、他の言語への紹介も何れはなされることが期待できる時代となっているのである。

もとより英語を常用とする人々以外にも日本語や日本文化を研究する人は増えていて、そうした人々による短歌の受容も増加することは容易に想像されるが、そうした英語以外の言語使用者に対しても短歌をそれぞれの言語で紹介してゆくというのは、現在のタンカ・ジャーナルの態勢では力に余ることである。従って、当面は英語による紹介に力を入れてゆくことに意を用いるべきであり、タンカ・ジャーナルに関係している人々も、圧倒的多数がその考えに賛成してると考えられる。さてタンカ・ジャーナルの編集作業の中心に位置するようになって以来、ひと時も忘れていないのは、つい一年前まで、絶大な牽引力を発揮していた川村ハツエさんのことである。彼女が病に倒れてほぼ一年。彼女を思い出すたびに、彼女が残した業績を忘れないで、その情熱をタンカ・ジャーナルの編集に生かさねばという思いを抱くのである。

彼女が残した業績を詳しく検証するには、時期を選ぶべきであろうが、彼女の主著、『TANKAの魅力』は、常に私の座右にある。その「あとがき」で彼女が触れているW. G. アストンの『日本文学史』を彼女はその後、全部日本語に訳して出版したのであった。

川村ハツエさんの志を無にしないように、いや、その志を更に発展させるために、彼女に育てられた私たちは、一層の努力を重ねなければと決意している。

平成16年度新入会員紹介

平成16年5月24日～平成17年5月

北海道　佐藤衛（青天）高橋梶子（国民文学）伊藤及子（国民文学）

岩　手　小林ますみ（天象）及川美保子（天象）中村幸子（天象）藤原重子（天象）足沢可津（天象）小松ヤス、鷹背真智子、梶川アツ子（天象）八重樫昇子（天象）佐藤ゆい（天象）熊谷澄江（天象）胡口美津子（天象）村上恵子（天象）佐藤ミチエ（天象）斎藤タキ（天象）森口せつ子（天象）村上まき（天象）高橋妙子、佐々木喜美子（天象）鈴木陽子（天象）舟野宏（天象）阿部常子（からたち）佐藤わかな（天象）岩淵澄子（天象）千葉府左子（天象）及川千代子（天象）佐々木照子（天象）千田フヂ子（天象）

秋　田　三浦吉助（潮音）

宮　城　伊藤静子（天象）関ケイ子、平野由美子（天象）川田永子（群山）高橋美枝子（地中海）工藤妙子（短歌人）阿部澄江（コスモス）

茨　城　中島静香（茨城歌人）草野豊（まひる野）宇野四樹、下村慶子（茨城歌人）田中ミチコ、藤樹郎（茨城歌人）浅野京子（白南風）星野とみ子（芸術と自由）渡辺智英子（白南風）谷川たか子、佐藤加奈（創生）関根香子（白南風）伊藤孝恵（からたち）山口恵子（かりん）川俣和枝（天象）内藤孝子（白南風）斉藤すみ子（歩道）三上恵美子（白南風）太田和子（白南風）小山弘（白南風）深井雅子（歌と観照）結束節子（天象）宇野四樹、寺田陽子（まひる野）小田倉量平、大関節子（茨城歌人）藤原いつ子（まひる野）永井俊郎（茨城歌人）小林薫子（まひる野）赤松泰子（茨城歌人）猿田彦太郎、落合千代子（白南風）田中拓也（心の花）古橋勝子（天象）大塚敬三（新アララギ）大内徳子（まひる野）大賀静子（まひる野）笹沼かず子（まひる野）佐藤美也子（まひる野）鈴木多恵子（まひる野）鈴木千代子（まひる野）園部真紀子（短歌21世紀）高尾明代（まひる野）高野芳久（山と湖）立原房江（まひる野）田中和子（まひる野）谷垣恵美子（餐）飛田正子（まひる野）長塚寿夫（山と湖）生田目達子（まひる野）塙紀子（まひる野）藤原つや子（まひる野）星野みよ子（まひる野）横田晴子（山と湖）大川きよ（白南風）袖山昌子（まひる野）須藤恵美子（まひる野）金井正、佐藤光雄、櫻井雅江（わりん）門田公子（熾）

群　馬　千葉つね子（白南風）福島栄子（黄花）

埼　玉　池田眞由美（白南風）内田輝代子（白南風）江幡芳枝、宇留野和子（天象）関口喜美子（天象）三友清史（花實）千葉勝征（鮒）法橋栄子、竹下茂子（合歓）水城春房（はな）金子貞雄（作風）天野和子（塔）石原比呂子（花實）結城綾乃（塔）厚川久代（鮒）佐藤由美（鮒）甲斐八重子（鮒）渡邉桂子（鮒）馬場久江（鮒）細谷富美子（鮒）古見美保子（鮒）舟山桂子（鮒）尾上喜子（鮒）太田豊（鮒）葦原辰雄（鮒）持田久子、森川柳子（鮒）岡部悦子（鮒）稲葉章三（吾妹）奥田巌（鮒）川口美根子（未来）清里みか（長流）宮田ゑつ子（長流）新井悦子（歌と観照）市原和歌（鮒）鯨井正義（国民文学）田中穂波（かりん）鈴木孝子（曠野）高村典子（かりん）真下義明（曠野）佐藤武雄（曠野）大野栄子（長風）中山昭一（白南風）松村長司（白南風）川島みね（白南風）関根一枝（白南風）高橋良子（水甕）伊東ときゑ松美子（白南風）叶玲子（歩道）酒巻淑子（白南風）栗原静江（白南風）弓場利子（藝術と自由）岡本菫子（国民文学）広田久子（日月）久保田恭子（白南風）中嶋好英（合歓）南条トヨ子（歩道）町田のり子（地上）三浦節子（砂金）島崎豊（鮒）森川和歌子（央）前田翔香（合歓）小田亜起子（合歓）坂本ゆかり（合歓）日塔妙子（合歓）渋谷みずほ（作風）榊原トシ子（ロゴス）清水美知子（鮒）山口実代（合歓）稲葉貞心（鮒）川崎真一（鮒）井ヶ田弘美（歩道）牧田初江（花實）望月静子（花實）藤井光子（鮒）野口愛子（水甕）石原洋子（合歓）富沢時子（合歓）

千　葉　福田文代（水甕）長谷川菊江（水甕）山口敬子（水甕）鈴木志津子（水甕）鈴木悦子（花實）田中智嘉子、近藤瑛子、三友松江（花實）桶川道子（まひる野）田辺フミ子（水甕）鈴木千寿子（玖）中川幸江、久保田和子（塔）前田彌生（ヤママユ）大沢眞子（水甕）最首洋子（泱）藤岡きぬよ（星座）山田冬子（水甕）花澤みつ子（水甕）鶴下純子（水甕）積田玲子（水甕）田中とし子（水甕）鈴木サダ子（水甕）、鈴木和枝（水甕）榎本幼子（水甕）今井淑子（水甕）小峯葉子（水甕）酒井和代（潮音）横山与志乃（歩道）豊島秀範（コスモス）小林一、前田えみ子（央）山中真知（鮒）金田トシ子（鮒）大澤二葉（鮒）高津和恵（花實）橋本幸子、高木範子（歌林）松本ノリ子（かりん）苅部國松（かりん）岩崎正子（長流）西嶋法子（かりん）谷光順晏（かりん）齋藤哲子（かりん）伊藤房枝（かりん）亀田則江（鮒）秋葉四郎。戸田佳子（歩道）竹之内八重子（橄欖）前田弥栄子（歩道）富田凉子（歩道）久保田洋子　下田徳恵（歩道）田口博司（かりん）積田優（歩道）西澤悟（歩道）大塚秀行、石井美保子　大塚祐子　尾城美子（からたち）納見美恵子（かりん）岡部イツ（泱）秋山周子（音）斉藤智子　柘植佐知子　鈴木眞澄（歩道）森文（かりん）森川忠子（歩道）河原井千鶴子（天象）加藤恵美子（歩道）本間百々代（歩道）畑中千恵子（砂金）荒川源吾（日月）小田切妙子（天象）鈴木扶美江（合歓）原口結子、笹森智子（合歓）能星ゑみ（水甕）川崎八重子　榎本美代子（花實）鈴木悠紀子（水甕）戸邉好子（吾妹）鈴木理會子（吾妹）斎藤淑子（吾妹）平塚宣子（央）野上千賀子（合歓）黒沼春代（合歓）鈴木扶美江（合歓）田中ヨシ子（合歓）田中房枝（合歓）藤島眞喜子（合歓）官野克行（ナイル）林一夫（鮒）笹森智子（合歓）原口結子　高橋祐子（泱）松村立子　相川幸子（花實）金子きん子（花實）滝沢せつ子（花實）小澤光恵（歩道）八鍬淳子（歩道）清宮紀子（歩道）藤島鉄俊（歩道）小笠原愛子、高津和恵（花實）田之上彬（霸王樹）立田文子（花實）長野洋子（花實）名取芳夫（花實）柳田順（花實）山下きわ（花實）田浦敏子（水甕）飯島清子（泱）佐々木光枝（かりん）東野典子（泱）藤永洋子（泱）安井尚子（泱）山口葉子（水甕）

栃　木　菊地七郎、小野由子（天象）

東　京　息吹翔泳（かりん）佐藤ミキ子　緑川美恵子（天象）森川多佳子（かりん）東山三代（純林）岩橋慶一（かりん）秋元妙子（天象）久保田聰子（くれたけ）酒井幸子（かりん）相沢和子（かりん）高木マキ子（天象）小林梅代（かりん）池田ふじ子（創作）須藤尚巳（新炎）岡田泰子（かりん）高橋クニ子（天象）開田美代子（かりん）関口伸子（かりん）白河里子（かりん）箕原和子（かりん）小林要（天象）氷室敬子（ナイル）山本花枝（白南風）小川壽子（合歓）井上次男（砂金）神郡一成、小林文江（花實）三友さよ子（花實）村井和枝（国民文学）久保美枝（鮒）伊藤好江（鮒）綾部光芳（響）加瀬正夫（軽雪）木島千恵（花實）下村道子、松村由利子、色紙和子（をだまき）吉田美穂子（新炎）神田重幸（迯水）渋谷知子（運河）榊原勘一、松島務（新アララギ）佐藤彰子（峡雲）室井慧（かりん）菅谷美奈子（花實）高井孝子（花實）金子あき（花實）渡辺古都江（花實）畑彩子（かりん）吉田久子（砂金）保科さやか（新炎）寺戸和子（かりん）喜代永勢津子　野村克哉（国民文学）鈴木悦子（花實）泉敬子　小牧淑江（新炎）平原美知子（鮒）逢坂定子（古今）鎌倉享子（運河）槇田三千子（かりん）中野れい子、小林幸子

（花實）小林静、北村文子、加沢隆（鮒）大崎靖子（砂金）清水則子（鮒）三澤靖彦（鮒）武居静子（鮒）丸山淳子、阿部悦子（鮒）武山千鶴（鮒）山田治男（吾妹）藤枝幸子（鮒）須崎文子（鮒）飯田英子（鮒）伴野郁子（創作）丸山由紀子（鮒）島田充子（覇王樹）進藤多紀（塔）佐伯裕子（未来）小石薫（塔）小原英二（鮒）川野綾子（代々木歌話会）志水せいら（清流）中村陽子（白南風）三木美和（白南風）丸山志げ子（かりん）古市三枝、長澤俊子、津島法子（白南風）志和池和子（白南風）秋廣良子（白南風）鋤崎和子（天象）崎山貞子（かりん）黒瀧みさほ（白南風）夏目雅代（水甕）高橋栄子（芸術と自由）陣内容子（曠野）堀江泡子（かりん）高井瑤子（藝術と自由）大河内つゆ子（白南風）菅野稔子（藝術と自由）友利健一（吾妹）河野喜助（吾妹）及川秀子（砂金）井口タヱ子（水甕）山田武子、中間芳子（長流）桜沢つや子（長流）太田澄江（長流）古谷照代（かりん）永安好子（国民文学）佐野豊子（かりん）水谷文子（かりん）中尾和子（白珠）野々村八重子（かがりび）西尾泰子（長流）小野田素子（長流）天野田鶴子（長流）斉藤昭子（長流）森松子（かりん）伊地知瑞代（鮒）門司久江（創作）鷲尾三枝子（かりん）増田啓子（かりん）中島峰子（かりん）緒方妙子（かりん）冨田節子（かりん）野原てい子（白南風）林三重子（ナイル）岩崎節子　大久保麗子（日月）小岩充親　杉村弘美　染野幸子　中島佳代子　柳沢学　原田孝江（天象）市村正枝（ナイル）武井静香（かりん）西澤富枝（からたち）松本幸子（新炎）平石一（鮒）斎藤美和子（白南風）岡田陽子（花實）清水惠美子（花實）長谷川ミチ（花實）皆川節子（花實）天利友枝（白南風）深作翠州（茨城歌人）三井弥生（茨城歌人）石井喜代子（天象）戸田やす子、今村和子（ナイル）副田千春（かりん）

神奈川　赤星千鶴子（かりん）鹿取未放（かりん）中村清子（天象）川端幸雄（天象）五十嵐伸之（かりん）千田政子（かりん）千々和久幸（香蘭）磯辺朋子（はな）角宮悦子（はな）吉村照代（醍醐）野地安伯（白路）小倉成美　宮脇はるか（開耶）小沼克彦（きさらぎ）河又世津子（きさらぎ）片野浜子　小市邦子（潮音）川野愛子（かりん）長友くに（かりん）蒲ヶ厚朱美（長流）神部京子（長流）瀬木志津江（かりん）村上富子（藝術と自由）田中健一郎（天象）丸岡良雄（天象）沢田純子（砂金）下南拓夫（詞楽の会）亞川マス子（まひる野）尾崎和子（水甕）陣内直樹（まひる野）池谷しげみ（かりん）長岡弘子（長流）佐怒賀弘子（かりん）松村富美子（白南風）大下一真（まひる野）砂田暁子（水甕）福田よしみ（白南風）高井瑤子（藝術と自由）古谷円（かりん）大沢眞子（水甕）

長野　松田富子（白夜）市川光男（未来山脈）田村三好（ポトナム）細川えい子（天象）関アツ子（未来山脈）光本恵子（未来山脈）江原玲（ポトナム）山中悦子（白南風）上条夏實（白南風）立石享子（白南風）矢口賀世（白南風）松田富子（白夜）

新潟　小川千賀子（白珠）田村和郎（潤）長谷川宏（青潮）

山梨　庭野摩里（短歌人）三枝良子（鮒）石井治子

富山　和田道子（白南風）大井照子（白南風）寄田即子（白南風）浅岡千枝子（かりん）岩村夕美子（白南風）大沢真喜子（白南風）堀井康子（白南風）市来愛子（白南風）

石川　敷田千枝子（沃）

福井　田中利喜太郎

静岡　小笠原小夜子（天象）福田正乃（天象）島田智大（天象）榑松靖彦（天象）鈴木秀子（天象）上野桂子（白南風）神谷知子（あふち短歌）小川みゑ（天象）鈴木幸子（天象）小池尹子（水甕）大橋光子（天象）田中美智子（天象）山梨玲子（水甕）浅場純子（水甕）鈴木文子（天象）宮本恵司（水甕）

愛知　林口僥子（水甕）伊神舞子（ナイル）本多正明（鮒）山内菊子（氷原）天白寛子（からたち）渡辺瑞夫

岐阜　桑田靖之（人）塚田いせ子（からたち）

三重　山口千種（新アララギ）

和歌山　山下喜和子（鮒）石井和子

大阪　船本雅子（天象）高市みどり（天象）中西維子（天象）高橋康子（天象）小林喜實枝（鮒）泉初子（鮒）中村寿子（鮒）三嶋和子（鮒）美富百々子（鮒）矢吹祐子（鮒）平川不二子（白南風）入谷幸子（鮒）

奈良　吉井久子（天象）島泰子（天象）西田美和子（天象）田中笑子（天象）鎌田明美（天象）

京都　伊藤きくゑ（鮒）

滋賀　小潟水脈（りとむ）

兵庫　河村都子（天象）勝呂貞子（天象）田鶴雅一（うた野）

広島　川西安代（ナイル）河本惠津子（かりん）藤井茂恵　井上彩（天象）木曽英子（天象）沖野泰子（ナイル）瀧村登美子（ナイル）石川幸子（ナイル）中垣有美子（ナイル）

島根　金山黎子（草木）山中紅翅（群緑）

岡山　勝瑞夫己子（龍）

徳島　西卓男（からたち）

香川　前田彌生（ヤママユ）

愛媛　松井幸枝（潮音）

高知　福井まゆみ（塔）

福岡　城島和子（ひのくに）酒井イオエ（水甕）平川不二子（椎木）野上徳夫（歌と観照）池田喜澄（青天）江上輝廣（草木）松本美貫子（ナイル）小副川美智子（ひのくに）中嶋敏子（氷原）坂田美惠子（ナイル）城島和子（ひのくに）冨田まり子（白南風）平田初女（白南風）

大分　梅木美穂（歌帖）外山ユキコ（歌帖）平岩ナオミ（歌帖）簗雅子（白南風）堀越和子（歌帖）賀来喜美（歌帖）植山眞由美（歌帖）矢田良子（歌帖）佐藤洋子（歌帖）田上伸（朱竹）寺司愛子（はなぶさ）矢田よし子（歌帖）佐藤澤子（歌帖）

長崎　松岡初音（覇王樹）中上鉄朗（あすなろ）山本トヨ子（あすなろ）吉田早苗（あすなろ）

熊本　清島あつ子

佐賀　梶山久美（ひのくに）遠藤絹子（ひのくに）西田雅子（ひのくに）梶山久美（ひのくに）宮内木箱（牙）

沖縄　東恩納清（短歌）

外国　Elizabeth Howard, Brigitte schütte, Elizabeth Howard, Mrigitte Schutte, RENATA KOCH, MEILIN LEE

定例総会風景

平成17年度定期総会出席者名簿

◎**秋田**　菅原恵子
◎**岩手**　鈴木和子、藤原重子、高橋妙子、佐藤ゆい、八重樫励子、舟野広、高橋優子、助川さち子、梶川アツ子
◎**宮城**　南條範男、平野由美子
◎**新潟**　中村光雄
◎**茨城**　小田倉量平、塚田沙玲、勝山一美、簗よし、石橋久美子、大塚洋子、鶴見豊吉、飯田秀夫、櫻井雅江、山川澄子、勝井かな子、中村典子、和希明美、麻田絹代、横田晴子、高野芳久、岡田久雄、鈴木和子、谷垣恵美子、川村安弘、市島紀郎、西口はま子、桐原富貴子、住谷寿子、日暮彌生、加味ます子、田中拓也、齋藤すみ子、松本和代、宇佐美矢寿子、秋葉静枝、野澤喜代子、野口敏子、小泉桄代、落合千代子、園部眞紀子、小田倉玲子、大滝世喜、勝山牧夫、樋川道子、金丸玉貴、佐藤甲太郎、柴岡直治、黒田青磁、関根秀子、宮田泰子、岡田達子、渡辺ともい、筑波葦子、関口恒四朗、生田目達子、青木保、猿田彦太郎、門田公子、田中ミチコ、宇留野むつみ、平澤良子、小沼青心、松崎国男、須々木誠一、津田惠美、大塚敬三、小原郁代、中根誠、添谷武男、片岡明、大丸利恵、宮本とく、身内ゆみ、照波とよ子、中崎長太、金井正、小原文子、海野庄一、海老沢幸子、下村慶子、渡辺知英子、大川きよ、浅野京子、下田尾三乃
◎**栃木**　山口光枝、堀喜恵子、横山岩男
◎**山梨**　川崎勝信
◎**長野**　久保田幸枝、光本恵子、関アツ子
◎**群馬**　阿部功、千葉つね子、里見佳保、田村朝子、越沢忠一
◎**埼玉**　浜口美知子、高橋良子、野口愛子、川崎信一、高橋康子、甲斐八重子、中山昭一、江幡芳枝、伊藤弘子、羽石秀夫、持田久子、高村典子、小川昌雄、酒井国江、稲葉貞心、久保田恭子、法橋栄子、町田のり子、島崎明光、内田輝代子、池田眞由美、芹澤貴子、大芝貫、大山末子、水城春房、三友さよ子、金子正男、水野久子、佐田毅、森田忠信、中富貴代、渡邉桂子、久保美枝、帯川千、木島千恵、山崎正男、牧田初江、ぬきわれいこ、宮島金作、結城文、小林文江、佐田公子、恩田英明、四元仰、平林静代、上島ナカ、遠藤勝、森口和歌子、梅澤鳳舞、馬場久枝、細谷登美子、奥田巌、竹下成子、関根志満子、中嶋浪子、叶玲子、吉住正子、湯浅八重子、三浦節子、森川和代、吉原久美、三友清史、三友松江、島崎榮一、市原志郎、寺島清文、奥良子、葦原辰雄、藤本重成、中村美代子、神戸園子、根岸雅子、林三重子、湯沢千代、小櫻京子、丹野ひさの、飛高敬、松本紀子、鈴木美知子、真下義明、関口喜美子、御供平信
◎**千葉**　野上千賀子、加藤優子、天野陽子、松本静泉、榎本美代子、大澤二葉、吉田耕士、佐藤八重子、鈴木扶美江、笹森智子、武田静江、田中ヨシ子、相川幸子、近藤節子、長谷川愛子、坂田和子、井上成子、田上信子、小川壽子、小林一、斉藤淑子、黒沼春代、高橋真砂、榎本孝子、庄司晴江、前田えみ子、紺野裕子、荒川源吾、栄藤公子、圭木令子、岡部克彦、山中真知、秋山周子、橋本幸子、金子きん子、山下雅子、小田朝雄、磯野榮子、石黒陽子、金田トシ子、五十嵐順子、宮崎和子、内海いね、土橋いそ子、松下總一郎、林一夫、原口結子、古川芳子、久保田和子、藤倉文子、神郡一成、久々湊盈子、尾城美子、中川央子、松村由利子、田中房枝、平塚宣子、加瀬正夫、福井孝、笠原恵美子、黒田純子、塩入照代、佐藤八重子、能村研三、神作光一、秋葉四郎
◎**東京**　内田孝子、木下豊和、林田鈴、阿部悦子、西川修子、細谷弘治、吉田久子、毛利洋子、久保田聰子、大河内つゆ子、三井弥生、成田キヨ、栗原佐智子、進藤多紀、小石薫、鈴木英子、藤井昭男、水沢竜夫、岡豊子、長澤重夫、小山田ふみ子、平田久美子、田村元、

作田紀子、中島峰子、高瀬ミサ子、西澤富枝、甲村秀雄、山本花枝、松原信孝、中原兼彦、雨宮梅子、中村千恵子、北爪英夫、島田充子、和嶋勝利、宿谷睦夫、友利健一、坂本喜由、林丕沙子、中島央子、杉田眞佐子、竹島道子、佐藤えみ子、磯田ひさ子、伊藤泓子、大崎靖子、藤井徳子、和田三郎、丸山由紀子、武居静子、土屋亮、稲葉章三、渡部紀子、魚住るみ子、西村佑子、瀬戸礼子、原田節子、下村正子、末吉道子、河合雅江、筑波笙子、山岸和子、比企敬至、清水則子、椎名恒治、河合真佐子、鷺尾三枝子、中根三枝子、平岡清子、伊藤由喜江、千原彰子、今枝敬昌、木村博夫、山野吾郎、中静勇、小原英二、小和田すみ子、山本さよ子、野原てい子、中尾和子、関とも、本間彰子、奈良みどり、佐々木よし子、今井信子、宮禮子、浅田雅一、森淑子、加藤英彦、秋広良子、久保田磯子、梓志乃、宮原勉、福岡薫、小島玉枝、三枝英夫、阿部倬子、金子あき、柳田祥子、武山千鶴、高松和子、窪田あつみ、南美智恵、池田ふじ子、小山とき子、松浦美智子、浅香佳子、志水美紀子、緒方妙子、五十嵐登美子、金井じゅん子、山内三三子、沢井朝子、中地俊夫、横山三樹、醍醐和、鈴木千代乃、成富美津子、尾澤紀明、広沢朝子、関場瞳、久保田フミエ、東山三代、市原友子、西尾芙美子、横山茂子、小池雪子、馬場英雄、田村雅之、塩田光子、福田龍生、尾佐竹雅子、服部あきの、鈴木明子、末継由紀子、藤室苑子、藤枝幸子、鈴木諄三、生沼義朗、片山恵美子、大越一男、押田仍宏、市村八洲彦、陣内容子、山田治男、谷川佐和子、小林千恵子、蔵野勇、金田義直、原田清、林田恒浩、三井ゆき、大塚善子、松坂弘、星野京、来嶋靖生
◎**神奈川**　小林邦子、山中登久子、蓮本ひろ子、日野原典子、佐藤圭子、岩本史子、高松有花、尾崎知子、朝井恭子、中村美稲、田代弥生、芝谷幸子、高橋佳代子、神部京子、下島由江、亀山保美恵、舟木澄子、桜井正子、田渕ヒロ子、林静峰、杉本照世、清水正子、鈴木和子、金山恵美子、渡辺和代、根本芳平、塚田キヌエ、松村富美子、福留フク子、早坂恭子、今野美枝子、佐々木千枝子、久方壽満子、中込カヨ子、池谷しげみ、塩野崎宏、山岸彩子、戸田恵美子、岩内敏行、森藝子、今野寿美、千田政子、結城みち子、三浦孝介、佐伯莉子、森本美子、長友くに、丸山郁夫、永平利夫、陳内直樹、八木茂子、二瓶一枝、八城水明、沼波万里子、岸本節子、青田伸夫、佐波洋子、堤恵子、古谷円、井上久美子、小島熱子、原ハル子、青井史、川井盛次、平田由喜子、山本かね子、矢野豊子、加納亜津代、梅田洋子、辻玲子、大友道夫、古川昌子、早河二三子、小松啓子、川辺古二、内藤たつ子、中川禮子、亜川マス子、関珠江、斎藤貴美子、町方和夫、植木節子、下南拓夫、伊藤宏見、桑山則子、大下一真、岩田正、永平緑、三枝昂之
◎**静岡**　湯川邦子、星谷亜紀、山本皐苗、原昭子、加藤寿美枝、畝美津子、池田光子、村松秀代、小川みゑ、市川緑、榑松靖彦、永田富美、星屋澄江、鈴木文子、小佐野豊子、岩辺辰子、市川緑、金子清子、洞田時子、小笠原小夜子、藤岡武雄
◎**富山**　寄田即子、和田道子、大井照子、今井和子、久泉迪雄
◎**石川**　永井正男
◎**愛知**　青木陽子、杉崎チセ子、小池貴久枝、本多正明、青木佐喜子、池田美恵子、高島壽美江、立松滋子、林口僥子、水井千恵子
◎**三重**　大平修身
◎**京都**　伊藤きくゑ、山本りつ子
◎**大阪**　小林喜實枝、美富百々子、三島和子、中村寿子、衣笠育子、泉初子
◎**高知**　市川敦子
◎**九州**　伊勢万信

工藤幸一氏を悼む
意志の人

佐久間　晟

日本歌人クラブ東北ブロック参与工藤幸一氏は、平成十七年三月三日の朝、静かにこの世を去られた。享年八十八でした。

前日の夜までは全く平常のご生活振りであったとか、それが一夜のうちに幽明境を異にされたのである。訃に接し耳を疑ったのは私ばかりではなかったろう。

振り返ってみれば、氏が宮城県短歌クラブの代表をお引き受けになってから四十五年余、何か期するものがおありのようで、「重任を妨げない」の規則以前に、むしろご自分から進んで代表をお引き受けになった。そして県短歌大会の継続実施のほか、氏の出身母体である河北新報社とタイアップした、三十四回に及ぶ東北短歌大会の開催。また新人発掘を目指した三十首詠による県短歌賞の設定など、新機軸による行事のほか、圧巻は何といっても県クラブ会員を網羅した出版事業の多彩さであったろう。「宮城県全歌人歌集」に始まり「宮城県を詠んだ歌人の足跡」「宮城の現代歌枕」「わたしの戦後詠」「宮城の短歌歳時記」「写真で見る宮城県昭和短歌史」「わたしのこの三首」「二〇〇一年の歌」。

これらの公的な事業のかたわら、十数冊に及ぶご自分の歌集・歌書を出版されているのである。そして更には「仙台文学」に拠る小説、また油絵など、多彩な精力的なご活躍振りには目をみはるばかりであった。いうならば、強固な意志の人であり、実行の人というべきお方であった。常にほほ笑みの中にも、精悍な眼差し、そして裂帛の気迫。今でもどこからか大声が聞こえて来るような錯覚にさえ駆られる。生前の業績に感謝しつつ、ご冥福をお祈りするのみである。

大井恵夫氏を悼む
寂蓼感の歌

高橋　誠一

日本歌人クラブ北関東地区幹事の大井恵夫（しげお）氏は一昨年四月、肝臓癌の手術以後入退院を繰り返していたが、去る三月二十二日夜ついに亡くなってしまった。二月に私が見舞った時は床に臥したままながら話も出来て、歌の話になるといつもの調子が窺えた。

闘病生活二年ともなれば辛かったであろうに大井氏は弱音を吐かなかった。歌誌「地表」の編集代表として、また日本歌人クラブの北関東地区幹事、群馬県歌人クラブ副会長・年刊歌集刊行委員、群馬県文学賞選考委員等、最期までその責任を果たそうとしておられたのである。突然の逝去は残念でならない。

昭和四十一年度群馬県文学賞を受賞した「土屋文明研究」は氏のライフワークともなった。昭和四十八年評論集『土屋文明―その故郷と歌』、平成二年『土屋文明―短歌の周辺』を出版。これらの研究は郷土の大先輩への深い愛敬の念から発するもので、実証的、論理明晰で土屋文明の人と作品に迫っている。

一方、歌集には昭和六十三年『大井恵夫歌集―星の家族』、平成十年『冬空』がある。

『大井恵夫歌集―星の家族』は夫人の一周忌供養の意をこめたもので、

わが秘むる心揺らぎにふれぬ妻うしろ姿のさびしきを言ふ

など妻への思い、温かな家庭愛に満ちている。

第二歌集『冬空』には、

夜中覚むる寂しさを言ひし妻にして同じ思ひを夜々ひとり耐ふ

など妻亡き後の寂蓼感の滲む秀歌が多い。

この歌集『冬空』は平成十年度日本歌人クラブ北関東地区優良歌集賞を受賞された。当日の姿が思い出される。

今は御冥福をお祈りするばかりである。

長澤美津氏を悼む

清部　千鶴子

長澤美津先生の訃報は、友人からの電話で受けた。覚悟はしていたがショックで、通り一片の挨拶しか出来なかった。今年の十一月十四日は先生の百歳の誕生日ゆえ、お祝いを密かに図って、その日の近づくのを心待ちにしていた矢先のことであった。

時折り、ご次男の重夫氏が送ってくださる先生の日常の写真に励まされていた私である。自分自身の神経性の病気のために、独りでは到底外出が出来ないでいる折り等に、不思議と先生から電話があって、地獄極楽が話題になったりしたけれど、そういう会話も今となっては一睡の夢になってしまったのである。

省みれば昭和二十四年四月、北見志保子を筆頭に、阿部静枝、川上小夜子、水町京子、五島美代子、生方たつゑ、長澤美津などの若い力の結集によって、一時代を築くことになる季刊誌「女人短歌」がスタートしたのである。今その創刊号を繙いて、今日においてもなお瑞々しさを失わない作品の命脈に触れ「圧倒的多数の会員が挙って自分自身の夢を扱っている」と声を大にして言うものである。

百歳を目前にして、先生は静かにきっぱりと旅立たれた。さすがの先生も生きることに一寸だけ疲れてしまわれたのかも知れないと思ったりしている。

さす指の先をどこまでのばすなら心しずまるところにとどく

これは保谷市の伏見稲荷神社の境内に建立された大きな根武川石の裏面に刻まれた先生の歌である。歌碑の表面には夫君雄次氏の筆になる「筆家」の二文字が大書されている。

残生か余生なるかはしらねどもわが身にとりてはいつも本番

旅先でも本番を生きておられるだろう。

故人哀悼

大橋久仁子（白　珠）	平成16年7月21日	
宮本　邦夫（原始林）	〃　11〃13〃	
町野　浩（吾　妹）	平成17年1月14日	
土屋　美子（鮒）	〃　2〃4〃	
国分キヨ子（えにしだ）	〃　2〃21〃	
木村　英一（茨城歌人）	〃　2〃25〃	
科野千代子（林　間）	〃　2〃25〃	
片岡　清美（あけび）	〃　3〃3〃	
島田　悦子（冬　雷）	〃　3〃22〃	
佐々木健洲（武都紀）	〃　4〃9〃	
山元　園葉	〃　4〃30〃	
佐々木雅子（遠つびと）	〃　5〃5〃	

日本歌人クラブ叢書参加募集

本叢書は日本近代文学館の〔日本歌人クラブ文庫〕として永久保存

叢書の概要

名　　称　日本歌人クラブ叢書（通し番号で管理）
結社の叢書No.との併記可
組方体裁　A５判　本文200頁　１頁３首　12ポ１行組み
参加条件　日本歌人クラブ入会後３年以上経過している会員で、その他の条件を問わない。
参加費用　別途、日本歌人クラブ事務局にお問い合わせください。
申込先　〒141-0022　東京都品川区東五反田１-12-５　秀栄ビル２Ｆ
TEL 03-3280-2986・FAX 03-3280-3249
日本歌人クラブ宛

印刷代金、部数などご相談ください。

タンカジャーナル研究会のお知らせ

The Tanka Journalの26号が間もなく完成して、近くお手許に届きます。これを記念して、次の要領で研究会を開催致します。ふるってご参加ください。希望者は、遅くとも２週間前までにハガキで塩野崎宏宅、The Tanka Journalあてに申し込みをしてください。

1．日時：９月13日（火）　13：00～夕刻
2．場所：日本歌人クラブ事務局
3．議題
(1) The Tanka Journal No.26について。（参加を希望された方に、予めどのあたりについて話してもらうか、連絡します。）
(2) James Kirkupさんの最近の作品について…椎木英輔
(3) 青木春枝さんのA Woman's Life について…間ルリ

編集後記

日本歌人クラブの総会では恒例のプログラムとして講演会が用意されます。今年は俳人のお話でしたが、選挙の手伝いに忙しくお聞きすることが出来ず残念でした。常々思うのですが、特に文学に限らなくても、時には広い芸術一般、例えば演劇、音楽、スポーツなどなどの広い分野から人をお招きして話を聞くことも面白いのではないでしょうか。全く違った世界にふれることが案外、歌作りの栄養源になることもあるのでは……。中央幹事会の企画の視野の一隅に入れていただければと思いつつ。（鈴木明子）

夏楓の木下が涼しい季です。

神作新会長に巻頭のことばをいただき、当会誌も新たに出発します。

今号をご覧くださるとおり、昨年度入会された方が非常に多く（583名）、変化があった年です。そして年々刊行の「アンソロジー・現代万葉集」へも多数の参加が反映されいよいよ充実したものになってゆきます。四月から個人情報保護法が施かれ、こちらの万葉集も巻末の名簿から住所、電話番号が外されます。名前は、あいうえお、の発音順に配列され、検索しやすくなったかと思います。（伊藤泓子）

曽野綾子著『アレキサンドリア』の文中に「葡萄酒と音楽は心を楽しませる。しかし、このいずれにも勝るものは、知恵を愛することである。笛と竪琴は心地よい調べを奏でる。しかし、このいずれにも勝るものは、楽しい会話である。」（『シラ書』）とあった。楽しい会話は人を罵ることでもなければ争うことでもなく、ましてや傷つけることでもない。

日本歌人クラブもこの会誌も、楽しい会話の場であって欲しいと思って来た。でき得る限り、皆様の会話の広場となり多くの方々にご登場願いたいと思っている。（星野　京）

この季節には、「雨過山轉青」という軸をよく見かけます。雨が止んだあとには、雲も去り連山の青さが、人の心を捉えて、洗われるような、さわやかなみずみずしさが残る、ということなのでしょう。心を覆っていた煩悩や妄想の暗雲が、消え去った後の清心の譬喩でもありましょう。

日本歌人クラブも、新しく選ばれた幹事の方々と共々、更に発展をしてゆくことを念じています。

148号を皆様のお手元にお送りします。（永平　緑）

◇幹事会メモ

2・25 会誌147号編集・星野京、永平緑、鈴木明子、伊藤泓子
3・1 日本歌人クラブ中央幹事選挙管理委員会委員長に原田清
3・2 会誌147号編集・星野、永平、鈴木、伊藤
3・8 ▲中央幹事会（3月）
▲日本歌人クラブ賞選考委員・藤岡武雄、市原志郎、林田恒浩、原田清、三井ゆき、大塚善子、新人賞選考委員・藤岡武雄、金田義直、永平緑、松坂弘、石黒陽子、神作光一、評論賞選考委員・梶木剛、岩田正、藤岡武雄、御供平佶、星野京
3・9 2005年版現代万葉集（以下万葉集とする）編集・星野、永平、伊藤
3・12 会誌147号初校・星野、永平、鈴木、伊藤
3・16 ▲会誌147号再校・星野、永平、鈴木、伊藤
▲万葉集編集・筑波笙子、丸山郁夫
3・23 第32回日本歌人クラブ賞選考会議・藤岡、市原、大塚、林田、原田、三井
3・25 万葉集編集・星野、永平、伊藤、筑波、丸山
3・29 第3回日本歌人クラブ評論賞選考会議・岩田正、梶木剛、藤岡武雄、星野京、御供平佶
3・30 ▲万葉集編集・星野、鈴木、伊藤、筑波、丸山、津田、下南拓夫
▲第11回日本歌人クラブ新人賞選考会議・藤岡武雄、石黒陽子、神作光一、松坂弘
4・1 会誌147号礼状等発送・星野、鈴木、伊藤
4・4 万葉集編集・星野、永平、鈴木、伊藤、丸山、津田、下南
4・5 会誌148号原稿依頼・星野、永平、鈴木、伊藤
4・6 タンカ・ジャーナルNo26編集・塩野崎宏、椎木英輔、川村安宏、林宏匡、相澤東洋子
4・12 ▲中央幹事会（4月）
▲南関東地域ブロック第54回神奈川県歌人会・春の短歌大会に万葉集1冊
同・地域ブロック第58回館山市文化祭短歌大会（平成17年11月3日）に万葉集3冊
▲日本歌人クラブヤング短歌連盟中国ブロック・「第15回岡山県児童生徒短歌作品募集並びに顕彰」へ運営資金5万円支援決定
4・13 文化庁の全日本短歌大会の新任担当者訪問・松坂弘幹事、文化庁から全日本短歌大会の賞状3通を受取る
4・19 万葉集編集・星野、永平、鈴木、伊藤、筑波、丸山、下南
4・26 万葉集編集・星野、永平、鈴木、伊藤、筑波、丸山、下南
5・4 万葉集編集・星野、永平、鈴木、伊藤、筑波、丸山、下南、浜口美知子
5・6 万葉集編集・星野、永平、鈴木、伊藤、筑波、丸山、下南、浜口
5・9 万葉集編集・星野、永平、鈴木、伊藤、丸山、下南、浜口
5・10 中央幹事会（5月）

◇事務所日録

3・1 日本歌人クラブ中央幹事選挙立候補届出受付開始
九州地域ブロック第96回長崎綜合短歌大会（17年5月15日）へ賞状一葉及び万葉集3冊
3・7 東北地域ブロック工藤幸一参与逝去
弔電奉呈
3・16 中央幹事選挙立候補者宛「立候補届受理書」14通を発送原田清。会誌147号発送用ラベルを盛口紙芸へ送付
4・18 幹事会議事録送付
4・25 「定期総会」及び「日本歌人クラブ中央幹事選挙についてのお知らせ」を発送
4・26 長澤美津名誉会員逝去・弔電奉呈
4・27 長澤家通夜に藤岡武雄会長代理として原田清幹事出席
5・2 第26回全日本短歌大会第一次選考資料を選者へ送付　（伊藤泓子記）